

---

# 妖魔紀伝

Zexeed

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

妖魔紀伝

### 【Zコード】

N1765D

### 【作者名】

Z e x e e d

### 【あらすじ】

突如人間界に現れた「妖魔」とさまざまな面でそれに関わっていく主人公「切裂剣妖」とその仲間達の戦いの第一章。

## プロローグ&amp;キャラクター紹介 + 一部専門語紹介

地球上で謎の殺人及び行方不明等の事件が発生。

また、大陸の急激な変動なども起こる。

それにより、世界は大きく変わってしまった。

調査隊が結成され、その原因がようやく分かった。

それは、未知の生命物体によるものだった。

この生命物体、1匹どころではすまない。

その生命物体は、人間に害をもたらす「魔」のつかい、「妖魔」と呼ばれた。

世界は妖魔に対抗すべく、ハンターの集団をつくりあげ、本格的に妖魔への戦いを仕掛けていった。

そしてようやく一時的にその騒動は多くの被害を出しながらも終わった…一時的に…

ここからは、時に妖魔に対抗し、時に妖魔のためにことをする、そして世界を変えていくとする1人の少年とそして仲間となつていく者の物語である…

以下、登場人物と専門語の解説ですが

携帯から閲覧されている方はPCからの閲覧をお勧めします。

・**切裂剣妖** … この物語の主人公、明るい性格な男。剣を使っての戦いを主とする。現在所持している剣は黒竜と蜘蛛の妖魔から貰つたスパイダ・セイバー。数年前に父を妖魔に殺されているが、それをきっかけに妖魔が一体何をしようとしているのか知るための旅に出ることにした。「セイズ」という謎が多い真人族の妖魔の男と契約をしたが、むしろ疑問が増えるだけであった。14歳

・**切裂剣斬** … 今はもう亡き剣妖の父親。妖魔ハンターのエイレクス支部リーダー。息子の剣妖をかばつて死んでしまった。

・**ジョーカー** … 剣斬直属の妖魔ハンターだつた男。剣妖らの行く先々でサポートをする。

・**セイズ** … 剣妖と契約をかわした妖魔。真人族の男。いろいろと謎が多い。妖魔だが、人間達に対する敵意のない存在であつた。契約をかわした妖魔は契約者となる人間と一体化に近い状態となるが、契約者の外見に変化は特はない。

・**撃双サイガ** … セリュアーラ手前で剣妖が出会つた契約者。腕に大きい爪を装備して戦う。真人族のティールガという男の妖魔と契約している。少々横暴な性格であり、剣妖のことを「ライバル」的現在として見ている。過去が明白ではない。15歳

・**深理楓香** … ルクレイへ向かう途中の森を抜けた先の草原にいた少女。なぜそんなところにいたのかはまだ定かではないが、理由づけて剣妖たちについってきた。契約者で、契約している妖魔はフェジリアという獣人族の男。そのため、剣妖やサイガとは少し違つた「自らの体に本物の羽がつく」能力を持つ。ただ、エイレクスの苗字と名前を持っているのに、金髪に緑色の眼なため、他国人としか思えない点がある。サイガと同じく、過去は明白ではない。何気に入

タイルは結構いい。14歳

専門語（劇中で語られていないものを含む）

- ・現行世界＝異人界

人間が暮らす世界のこと、表の地球とも言う。  
剣妖たちは現行世界と呼び、魔界の住人は異人界と呼ぶ。  
また、魔界の一般的な住人からしてみれば、人間界の魔界の概念と  
同じく「フィクション」の存在である。  
ちなみに「世界全体の言語統一」がなされている。

- ・魔界（希素の説明を含む）

一般的に「魔界」というと悪魔や妖怪、魔物のすむ世界であり「よいイメージ」がない世界である。

が、妖魔紀伝シリーズにおいては「妖魔」が住む世界というため、現行世界の人間が名をつけただけであるため、それらとは異なる。（尚、現行世界の住民と違い魔界のことを魔界の住民は「世界」という、が、一部の者は「魔界」とも呼ぶ）

妖魔紀伝シリーズでは、魔界というのは重力の差などによつて生じたそれぞれの星々に存在する反世界である。  
まず、現行世界との相違点であるが反世界のために「昼夜」が存在しない。

の内側の世界といえば分かりやすいが、魔界にとつては地の底にあるものが宇宙なのである。

（しかし、貫通させることは不可能である）

これにより、光源体である太陽も地の下「」になり、昼夜が存在しなくなる。

しかし、太陽は存在していないわけではないため、その熱は伝わる。では、なぜそんな世界で生物が生きていけるのか簡単な話しにすると、魔界には「窒素」が存在せず「希素（現行界の住人いわくは「魔素 - i v i l i s 」）」が存在する。（尚、魔界にも酸素は存在し、それがなければ生物は生きていけないという事実は変わらない）

この希素というものは夢のような元素である。

まず、希素が窒素と結合すると分子外電子反応が起き、発光する。窒素は魔界には存在しないが、人間界に存在する。すなわち現行世界と繋がるインビンジ・ゲートの元には存在し、そこから発光している。

ただしこれは「窒素 < 希素」でおきる現象であり、現行世界においては「窒素 > 希素」となるため

「妖蓄鉱」<sup>妖怪の鉱</sup>という発光する固体となる。

妖氣<sup>妖怪の氣</sup>というのはこの「希素」と「氣力（生氣）」が反応する」とによつて確認されるものである。

（それゆえに、妖氣を使った波動などは現行世界では「光る」ともある）

この希素によつて、魔界の生物は進化したといつわけである。また、このように「氣力」と反応するため、例えば飢えた犬などは、その思いと氣力から「狂犬」と化すことなどもある。そのため、狂うものは驚異的な力を手にすることなどもある。しかし魔界自身は広い世界であるために、魔界の住人でも知らないことが多い。

#### - 主な魔界の種族

魔界においては多数の種族が存在する。

- ・「現行世界の支配者である人間」に最も似ている「真人族」
- ・獣から希素で人のような姿へと進化を果たした「獸人族」
- ・植物から動物へと進化することに成功した「植人族」
- ・体の主成分に金属物質が多く混じりこんだ「金人族」
- ・強大な妖力があり、あまり表層には現れずひつそりと暮らすことが多い「真魔族」

他、妖魔とは呼ばれない者には「人魚族」などが存在する（本編にて解説される）

また、上記の者達は全て「人」と呼ばれるものである。

- ・神（1章～4章までの登場予定はなし）

インビンジ・ゲートに住んでいた特殊な住人という風に考えるのが一般的である。

そもそも、インビンジ・ゲートは1cmにも満たないものであるが、その「存在が考えられない先」に存在するものは「人知を超えた力」を持つという。

しかし、2つの世界への干渉はほぼできず、主に見ているだけの存在である。

また、神だからといって「絶対」ではない。あくまで世界というものは「自然現象」による產物であり、神とはいえどもそこまでには至らない。

## 第1話 運命…

ある日… IJの日が運命の日となることなど誰も知りはしない

大國エイレクス、元日本  
IJの国に剣妖けんようの家はある

剣妖が階段から降りてきた

「おお、起きたか」

そういうのは彼の父きみ、さき切裂剣斬きりさきけんざんであった

「父さん… 今日も仕事…？」

「悪いな… IJのところ全然休みがとれないんだ」

「せつからく10歳にもなつたつていうのに… 仕事つてなんなのさ」

剣斬の目つきが少し変わる

「お前に話す必要は無いといつたはずだ」

「またそればっかり…」

剣斬は一度も自分の仕事を剣妖に話したことがないのだと、呼鈴が鳴る 剣妖は扉を開けた

「あ、ジョーカーさん」

「おはよう剣妖君」

このジョーカーと言う男、剣斬の後輩… といつらじい

「ジョーカー…どうしたんだ？」

といつら声とともに剣斬が玄関に出てくる

「剣斬さん、迎えに来たんですよ、前に言つたじやないですか」

「そういうえばそうだったかな… まあいや、とりあえずあがつときな」

「じゃあ俺外行つて来るよ」

剣妖は外に出た と、ここであることに気づく

「（あれ… 車にエンジンがかかりっぱなし…）」

と、ここで剣妖はあることを思いつく

「（そうだ、この車の裏に忍び込めば父さんの仕事場にいける…）」

剣妖はトランクを開け、そこに入つた

10分後、剣斬とジョーカーが家から出てきて車に乗り込んだ

そして目的の場所へと車は向かつていつた

剣妖は父達の話も聞こうとしていたが、声が小さくあまり聞こえなかつたので目的地に着くまで

父達の仕事を知ることはできない

：それからどのくらい経つただろうか 剣妖はトランクの窓から沈む夕日を見ていた

「（…何時間走ったんだ…それにここは…）」

辺りには見たことの無い景色が広がつていた

## 第2話 突然の悲劇

車は止まつた…いや、止まつていたのに剣妖がきずいていなかつただけのようだ。

ついさつきまではかすかに聞こえていた剣斬とジョーカーの声も一切聞こえなくなつてしまつた。

「（マジでここ何処だ…）」

さすがに剣妖も気になつたので、車から降りた。辺りは木ばかりで周りには人の気配も無かつた。

しかし剣妖はてきとうに先へと進んだ。頼りになるのは自らの勘だけだと考えたらしい。

意外にも勘は見事に的中した。すぐ近くで金属音のような音が聞こえたからだ。

彼は音のあつた場所へ向かつて走つた。すると人影のようなものが見えた。

「父さ……！？」

剣妖は一瞬何が起つているのかわからなくなつた。すぐさま彼は近くにあつた大木の後ろに身を潜めた。

「（な…なんだ今…？）」

剣妖は再びその大木の陰からのぞいてみた。

そこには右手に刀を持つた剣斬と両手に銃を持つたジョーカー。そして得体も知れない長い牙の生えた一本足で立つてゐる狼のようなヤツが十数体…

「くそつ…今までの奴らよりは遙かに力がありやがる…」

「（なに言つてんだ父さん！？今までの奴つて…？？）」

そんな中一体の謎の生物が剣斬に向かつて襲い掛かってきた。剣斬はそいつを持つていた刀で斬つた。

「まとめて切る…！」

「援護します、剣斬さん」

剣妖はそれを見ているだけだった。体が動かない、頭の中は真っ白になっている。剣斬とジョーカーは周りのヤツらを次々に倒していった。あっという間に周りの敵は全滅した。

急に剣妖の足もとがくらついて木の前へと出でてしまった。しかし、剣妖は何が起きているのかすら分かつていなかった。

「剣よ……！」

剣斬は剣妖に……そしてその背後の謎の生物にも気がついた。彼は剣妖に向かつて走り出した。謎の生物も爪で襲い掛かろうとする。

ズグシャツッ…………！！！その音の後剣妖の前には謎の生物を刀で切つたが爪に引き裂かれ血が出て倒れこんだ剣斬がいた。

「…………ハツ…………と…………父さん…………！」

剣妖は意識が戻った。しかし既に遅かった。

彼の足元には倒れこんだ父親と引き裂かれて真つ二つになつた謎の生物と赤黒く染まつた刀があるだけだった。

「父さあああああん…………！」

### 第3話 天命と始まり

車の中、剣妖は助手席に座っていた。

「…剣斬さんはいざれこうなることが分かつていたんだ…」

ジョーカーは運転する中彼に話しかけた。後ろには剣斬が横になつてイスの上におかれていた。心臓は既に止まつっていたのだった。

剣妖は何も話そうとはしなかつた…

朝方、車は剣妖の家の前に着いた。剣斬はその時先に家にいた謎の人達によつてどこかへと運ばれた。2人は家中に入り、リビングのテーブル前のイスに向かい合つて座つた。

「…ジョーカーさんや父さんは何なの…」

剣妖は口を開いた。

「僕たちは『妖魔ハンター』っていうんだ。…さつき君も見たあの変な生き物のことを僕たちはまとめて妖魔って呼んでるんだ。最近起きている原因不明の事故を起こしているのが奴らなんだ。それでそいつらを倒して事故を減らすつていうのが第一の仕事。剣斬さんは僕たちの上司に当たつていてね…」

ジョーカーは言い辛そうだったが、剣妖はその話を真剣に聞いていた。

「…剣妖君はこれからどうするんだい…もうこんなことに関わりたくないと思うけど…」

剣妖はそれを聞いてうつむいてしまつた。

「そうだ…剣斬さんが言つていたことがある…剣妖君、ちょっとついて来てくれないか。」

ジョーカーはそう言つと立ち上がり外に出た。剣妖もその後を追いかけた。

2人は家の後ろにいた。

「確かここだつたな…」

ジョーカーはなにやら印のついた地面を掘り始めた。剣妖はそれを

不思議そうに見ていた。

「……！」

すると地中から土まみれの刀が出てきた。

「ジョーカーさん、それ……」

剣妖は続けて言おうとしたがジョーカーが割り込んで話をしてきた。

「これは剣斬さんの最高の『相棒』だつたんだ、僕よね。」

ジョーカーは立ち上がりて刀を両手に持ち、剣妖の前に立った。

「剣斬さんがこうなることを分かつていてたつてさつき言つたよね……」

剣妖はそう言うと下を向いてしまった。ジョーカーはそうなるだろうと思つていたらしいが、話を続けた。

「剣斬さんは言つていたよ。この刀を剣斬さんが使うのをやめたのはどういう理由かは分からぬけど、一つだけ『オレは常に死と隣り合わせにいるんだ。剣妖には戦いには巻き込まれてほしくないと思つていて。でもそれはあくまで表面上、親としてだ。だが剣斬としてのオレは本当は戦つてほしいと思つていてる……』ってね。」

ジョーカーは刀を前に出した。剣妖は何かに駆られその刀を受け取つた。

「その刀の名前は『黒竜』さ。刃が黒いんだ。その刀をどうするかは君の自由だけど君の未来は今決めないといけない。」

「オ…オレは……」

それから約4年もの月日が流れた。その日、剣妖は森の前に立つていた。彼の腰には黒竜がついていた。後ろにはジョーカーが立つていた。

「行くんだね……」

ジョーカーは決して止めようとはしなかつた。

「この森を抜ければルクレイにつく。あらかじめ国を出るのはこっちで何とかしておいたから。……これから先は何があるか分からぬよ。」

「分かっています。でも、もう行くんで。」

「剣妖の眼に迷いはなかつた。」

「君が妖魔ハンターにならなかつたのは正解だつたと思つよ。妖魔

にはまだ僕らにも分からぬことが多いからね。」

剣妖は後ろのジョーカーを向いてうなずいた。

彼は旅立つた。これが全ての始まりとなつた。

## 第4話 剣妖の目的 - 危機 -

剣妖は森の中にいる。

入つてもう十数時間たつたが今日中には抜けられそうにはない。彼はそう悟つた。

と、そこで彼は大きな木を見つけた。おそらく彼の8倍以上の幅はある。

仕方がないので今日はそこで寝ることにした。

「（にしても不気味な森だな…まるで監視されてるみたいな感じだぜ…）」

辺りには木や草しか見当たらない。

剣妖がもう眠くなつてきたその時、彼は自分の足に違和感を感じた。見ると右足が太いつるに締め付けられている。

「（な…！？）チイツ…！」

剣妖はすぐに自分の腰から黒竜を抜いて、そのつるを切つた。その中からは怪しい濃い紫色の液体が勢いよく飛びってきた。しかしそのつるは切り取れはせず、奥のほうに引いていつた。彼はすぐに立ち上がりつてそのつるを追いかけていつた。草をかき分けてその先に見えたものは、

『口のついた木の化け物』だつた。しかもそいつはさつきまで彼が寝ていたあの木と同じくらいの大きさがある。が、そいつは剣妖が追つてきたことにも気づいていないようで、そいつのもとの方は普通の木のようないに地に根でへばりついていた。

「（あいつがオレに気づく前に…）つおおらああ…！」

剣妖はそいつに向かつて切りかかつた。しかし、一刀両断とはいからず、少々深い傷が付いただけであつた。しかもそれのせいでそいつは剣妖に気づいてしまつた。そいつは奇怪な叫び声をあげて剣妖にさつきよりも太いつるで襲い掛かつてきた。

「うわっ…！…（あ…危ねえ…）」

剣妖はかろつじて後ろに下がつてよけた。しかしすぐに一発目がきた。一発目は真っ直ぐ彼に向かってきたので彼は剣を横に振った。が、つるは黒竜を感じしたのかどうかは知らないが、よけて剣妖の喉めがけて向かってきた。剣妖は剣の振りをはずしたせいでバランスが崩れて体勢を立て直せないでいる。

「（しつ…しまつた…）」

ズグッシャアッ…！！！

…森の中で何かが噴き出す音が響いた…

## 第5話 剣妖の目的 - 攻め -

「……」

剣妖は最初にいたあの木の根元で持つててきた毛布をはおつて寝ていた。少し離れたところで焚火が炊かれていた。と、そこに誰かがいるのに気付いた。「一トを着た銀色の髪の男だつた。彼はすぐに体を起こした。その音でその男も剣妖が起きたことに気付いた。

「どうやら目が覚めたみたいだな。」

その男は剣妖のほうに歩いてきた。剣妖は念のため腰に手をのばして黒竜に手をかけようとした。が、なんとその男の右手が剣妖の手首をつかんでいた。一瞬のうちにその男は剣妖の目の前まで来ていたのだった。

「な！ ！ てめえ……」

「おいおい、命の恩人に対してもははないんじやない。それとあれ

……」

その男は後ろの焚き火のほうを見た。そこには黒竜がおいてあつた。剣妖は無言で睨みながら手を振りほどき黒竜に駆け寄つて取つた。

「まあとにかく、そんなに焦らないでそこに座りなよ。」

剣妖は渋々その場に座つた。

「（一応あいつから殺氣は感じねえからな……でも……）」

剣妖にはどうしても気になることがあつた。

「聞きたいことがあるがいいか？」

男も焚き火を境に剣妖の向かいにそう言いながら座つた。

「別にどうぞ……」

「そうか……じゃ、言わせてもらひつか……」

男の目つきが厳しいものになる。

「お前……なんでここにいるんだ？」

男は上から目線で言つた。

「それがなんなんだよ、お前には関係のないことだろ。確かに助け

てもらつたことには感謝するが…」

「じゃあこれを聞いたらどう思う…」

剣妖は自分の話を止められたことに少し苛立ちを感じたが、男の話を聞く」とした。

「オレは… 妖魔だ…」

本来なら事情を知つてゐる人間なら驚きを隠せないであろう。しかし剣妖は冷静だった。

「……やつぱしな…」

剣妖にはもう分かつっていたのだ。

「分かつていたらしいな…」

「ああ、だいたいこの森に入つた時からオレの周りに何か妙な奴がいるつづーことは何となく感ずいていたのでな。それがお前だろ?」

妖魔の男はフツと笑つて立ち上がつた。

「悪いことは言わん、ここからは立ち去つた方がいいぞ。」

「な…お前それどういう意味だ!?」

剣妖もさすがに少し取り乱し、立つた。

「お前は死ぬために旅をしているわけではないのだろう。」

男は上から目線で剣妖に話してきた。剣妖はその言葉に対し

「…だからなんなんだよ、オレは死ぬ覚悟はできている。」

「フ…じゃあ質問をもつと分かりやすいものにしてやるよ、…お前…何のために旅をしてんだ?」

男の目がより鋭い目つきとなつた。

「そ…それは…」

剣妖は言葉が詰まつてしまつた。

「（オ…オレは一体何のために旅に出ようとしたんだ…父さんの敵をとるため…いや…でもそれにオレは…）」

剣妖の頭にはいろんなことが浮かんでいた。彼はこの旅の重みを感じていた。たつた一人の人間が妖魔に出会つたら普通なら殺される、そして自分がそのただの人間に当てはまることも分かつてきてしまつたのだ。だいたいジョーカーの元でいくら鍛えてもらつたからと

いつてもそのジョーカーの目指していた剣斬さえ妖魔によつてああなつてしまつたのだ。

「自分の無謀さを知つたようだな。ちなみにオレの名はセイズ、眞人族の妖魔だ。今日はもう遅い。オレはもう行くからな、お前にそれでも進むというなら行けばいい、オレは忠告をしただけだからな。

」セイズと名乗つたその妖魔は立ち去ろうとした。

「…オレをおびえさせでもして立ち去ろうつづーのか…」

「フーン…意外に立ち直り早いね。」

「ああ、やっぱしオレは旅い続けねえといけないような気がすんだ。

」  
「へえ……！？」

突然セイズは何も見えない横の茂みを振り向いた。

「まさか来るとはな…」

「来るつて……？」

「帰れとは言わんがすぐここからは立ち去れー！」

セイズは茂みに向かつて警戒しつつ剣妖に対して叫んだ。

「一体何だつて言つんだよ！だいたいお前のことすらまだ…」

「離れろーーーー！」

剣妖がセイズに話している途中でセイズは割り込んで怒鳴つた。『さすがにまずいかもしない』と思つたのか剣妖はその場から左へ2、3歩ずれた。それより1秒もしないうちにセイズも右上に大きく跳んだ。すると茂みから先ほどセイズと剣妖のいた場所2箇所とも通るようにして鋭い槍のような何かが反対側の茂みへと突き抜けていった。しかもどんでもない速さだつた。

しかし安心などできなかつた。後ろからまたそれがやつてきたのだ。  
かろうじて剣妖は避けて、すぐに黒竜を抜いた。

「（絶対にまた来るはずだ、そいつを仕留めるー。）」

「馬鹿野郎！…そいつに向かってくな…」

セイズがそれを見て再び叫ぶ、しかし剣妖

振つた。

キイイイイイイン！－！－！－！

その音は鋸同士が互いにささげたとれるよハが音だ

[ 11 ]

こうなることなど剣妖には想像もつかなかつただろう。なんと槍の  
ようなものが切れていないのだ。そのままそいつは剣妖に向かつて  
きたが、幸い黒竜がはじかれたことによつて左肩にかすり傷だけで  
すんだ。

「（なんだあいつは……）」

剣妖は左肩を抑えた。と、後ろから人影が飛びってきた。セイズだつた。

「てやああああつつ……！」

剣妖は目の前の光景に驚愕した。セイズの蹴りがそいつを折つたからだ。

「！…（…これが妖魔だつていうのか…）」

剣妖は声も出なかつた。だいたいそんな間にセイズは彼の真横から来たそれを避けてつかんだ。

「ようやく捕らえた…」

そう言つとセイズはそれをつたつて茂みの奥へと走つて消えていつた。それを見ていた剣妖にはいろんなことが頭に浮かんできたが、出した結論は一つであつた。そして剣妖はセイズと同じようにそいつをつたつて茂みの奥へと走つていつた。走つている間にいくつか剣妖のつたつている物と同じものが前方から向かつて飛んできたが、剣妖は全て避けながら前進していつた。またそれは彼にある確信を持たせた。

「（絶対にこの先にこいつの元凶があるはず…！…）」

暗くてよく見えない中だつたが、剣妖は茂みから外に出れた。

「グアアアアアアツ！…！」

出た瞬間叫びが聞こえた。同時に「ズサツ」と何かが突き刺さるような音がした。剣妖はすぐさまその声のする方向に走つた。

「セイズ！…！」

そこには右肩をあの槍のようなものに突き抜かれ、そのまま背後の木に貼り付けられているような状態になつたセイズがいた。

「お…お前…立ち去れといったはずだろ…！」

セイズは彼を見るなりそう言つた。

「…誰かに命を救われ、そのままそいつの危機を見捨てて帰る奴なんかいるのかよ…少なくともオレにはそんなことはできねえな。」

剣妖はセイズの正面に立ちふさがり、黒竜を再び抜く。

「おい、そんなことすると……」

しかし、セイズが注意しようとした時には既に彼の目の前からは一発目が向かってきた。が、剣妖は決して避けようとはしなかった。

「来い……」

槍のようなものは剣妖の左肩を狙つてきた。おそらく剣妖のいることなどには気づかず、そのままセイズを完全に貼り付けようとしているのである。

スペアアアン……

一瞬だつた。剣妖は先から少し後ろを切り、平らになつた先を左手で押さえた。

「……（こいつ……短時間でこんなことを考えついたというのか……！）

フフフフフ……

「……な……なんだよ？」

剣妖は急に笑い出したセイズを不思議に感じた。

「フフ……いや……そういえばお前の名をまだ聞いていなかつたな。」

「（こんな時に聞くことか？……まあいい）剣妖、切裂剣妖だ……」

「（切裂……！？……そういうことか……）なるほどね……」

セイズは少しニヤリと笑みを浮かべた。

「？」

剣妖には全然何がなんだか分かつていない。

「剣妖……契約だ……」

## 第7話 剣妖の目的・決断 -

「？契約…何のことだ？」

剣妖には全然意味がわからなかつた。そもそも、こんなピンチにセイズはいつたい何を言つてんだつて普通は思つはずである。

「手を出せ！オマエはここで死ぬようなほどの者じやない。」

「き…急に何を…」

そんなことを言つてゐる間にセイズのほうから剣妖の手をつかんできた。

「オマエには妖魔と戦う覚悟…そして、妖魔と共に進む覚悟がある…そしてそのためにはもつと力が欲しいと思つてゐるだろ…オレにはそう見えるがどうなんだ。」

「意味わかんねえよ…」

剣妖にとつて急にそんなことを言われてどいつも対応のしようがなかつた。

「それもさうかもしれない…でも、ここでこのまま死んで納得がいくか…？」

「…死ぬんならその前に悔いがないようにしてえ…その契約とか…いつやつ…よく分かりやしねえけど…力が…戦つていける力を手にできるんなら…やつてやるうじやねえか……」

剣妖はセイズの手を自分から強く握つた。

「フン…これからおまえはオレの契約者だ…そつなるんだからオレに恥をかかせるようなことは許せはしないからな…」

セイズはそう剣妖にささやいた。

「お前こそ、変なことをしやがつたら世界の果てまで追つて消し去つてやるからな…」

剣妖のその言葉にセイズは少し笑みを浮かべた。

セイズは眼を閉じ、なにやら集中し始めた。そして、二人の手の間で強く青白く輝く光が放たれ、その光は徐々に広がつていき、つい

には一人を完全に包み込んだ。剣妖はその光の中、自分の中に何かが入ってくるようだつた。

「これから起ること…全て受け入れていけよ…」

剣妖にはセイズの声がかすかに聞こえた。だが、それは耳から入つてくるようなものではなく、

むしろ自分の中から聞こえてきているように彼は感じた。

次の瞬間、剣妖の脳裏に何かがよぎつた。

それはあまりにも一瞬で剣妖自信なんなかつた。が、何かがあつたことは確信できた。そして青白い光は消えていく。光のあとに残つていたのは剣妖一人だけであつた。

「これは…」

剣妖は不思議だつた。妙な力を感じるのだ。それは自分の真正面の奥からだつた。

『来るぞ…！』

「！？…」

今聞こえた声はまさしくセイズのものであつた。しかし、ここには剣妖しかいない。

「あ…あれは…！？」

剣妖の目の先にあの槍のようなものが見えた。

「！…！」

## 第8話 剣妖の目的 - 信頼 -

剣妖は槍の元へと走つて向つていた。目の前からは槍が彼に襲い掛かつてきている。が、彼は別にそれを恐れても怖がつてもいなかつた。

「来やがつたな…」

剣妖はすかさず手を裏返してつかみ、そのまま手を滑らせてよけた。

『… いまだに信用できないのか…？』

セイズの声がした。しかし、剣妖はもう驚きはしなかつた。

「…いや… そうじやない。 （… 何となく予想できるが『契約』って

…）

『契約のことか…』

「え！？」

剣妖はそのセイズの言葉には驚いた。自分が考えただけのことに返答をしてきたからだ。

『… そういうえばいっていなかつたな、… 契約というのは簡単に言うと、オレたち妖魔の力をおまえ達のような人間に全て移すことだ。』

「… 最終的には俺の体をのつとるとでも？」

剣妖の心情は驚きから少しだけ緊張へと傾いた。

『… のつとる！？… ハハ、全く面白いことを考えるな。だがそれは違う、だいたいお前の体をのつとるのならお前を殺してからやつているはずだよ。… それにオレ達のような契約をする妖魔の目的はそんなものではないな。』

「なら… ！！」

剣妖にはセイズの目的が気になつて仕方がなかつた。しかし、彼の足は勝手に走つていていた。

『… そう力むな、まだオレの話も終わつてねえだろ？が。 さつき言つたことの他に、契約は… そうだな、お前にオレが取り付いているみたいな感じだ。だからお前の考えとかも、オレに全部伝わつてくる

んだ。』

剣妖は黙り込んでいた。ただ、考へてはいたつた一つ、セイズのことだけであった。といつても、考へはまともらず、頭の中にいろいろ「じゅや」「じちや」に浮かび上がつてきていった。『オレがお前と契約した理由は後にでも話す。いいか、とにかくこれだけは信じて欲しい、オレはお前に危害をくわえる気は一切ない。それと……一つ聞きたい。』

「何だ、お前はオレの考へを読み取れるんだら、寒態もねえくせに……」

『お前の口から真実を聞きたいんだ。……剣斬は、切裂剣斬は、死んだのか……』

セイズは剣妖が傷つくかもしれないと思つた。しかし……

「……ああ、死んだよ。つい先日……な……オレの身代わりになつてな。」

『あ……そ……そ……（じいじにとつて剣斬のことば言つべきではないのかと思つていたのだがな……）』

逆にセイズの方が衝撃を受けたような感じになつていた。そんな話をしている内に剣妖はなにやら広い場所に出た。

「……何か嫌な予感がする……」

剣妖は茂みから出た途端に足を止めた。

『それは、お前が妖気を感じ取れるようになつたからだ。』

「妖気……」

剣妖にはおおよそ予想はついていた。契約した直後から今までにはかつた決して良いものではない空氣を感じ取つてはいたからだ。

『ああ。妖魔が持つている力が妖気、といつてもパワーとかそういうものではなく、エネルギー的なものだがな、それにお前だつてオレと契や……』

「来る……」

すると、すぐに剣妖の目の前からアレが飛んできた。

「ん……!?」

剣妖は少し何か不思議に感じつつ、体を右にそらして避けた。

「（今、一瞬アレが木の枝のように見えたような…）」

『あながち間違いじゃないぞ…』

「？？」

剣妖にはそのサイズの言葉の意味がイマイチよく分からなかつた。が、この先に向つて進めばその答えが分かると思つて再び走り出した。

## 第9話 結論と別れ

日が昇ってきていたので辺りは既に見通しがよくなってきた。

「こ……こいつがあのつるの元凶か……」

剣妖の目の前にはあの時に会った木の化け物がいた。

『そう、その通りだ。それとあれはつるじゃなく、あいつの枝が少し変化したものだ。』

「……にしてもなんか光ってねえか……？（オレが会った時にはただの木とそう外見は変わらなかつたような……）」

剣妖の目は正しかつた。その木の化け物は何やら金属のような体であつた。

『そうだな……あいつは植物系の食人植物の仲間だ。そいつらの中には体を硬化できるものがいてな、あいつもその部類だらう。』

『（……さつきから攻撃して来ねえな……どうかしたのか……？むしろ不気味だ。）』

剣妖が「こ」に着いてから木の化け物は微動たりともしなかつた。

『あいつの枝は血によく反応するからな。』

「なんだそんなことかよ。じゃあ手つ取り早く……」

剣妖はそう言いながら黒龍を引き抜き、近づいていく。

『待て！むやみに近づくな！…』

「え……」

その瞬間、剣妖の足場が持ち上がりだす。彼はすぐに後ろへと下がる。

「な……何だ！？」

『やられたな……』

辺りの地面から木の化け物のでかい根が出てくる。そして何本もの枝が剣妖に向つて襲い掛かってきた。

「うおっ！？」

剣妖は何とか枝のないところへ避ける。

「な……なんで急に……！？」

すぐに次が来た。剣妖は黒竜で目の前の枝を強引に切り、そこに入つてやり過ごす。

『あいつがトラップかなんか仕掛けたんだろう。多分そいつのおかげでお前のいる場所が分かるんだろうよ。』

「なるほどな……なら……」

剣妖は化け物に向つて走り出す。

『お前、何を！？』

「決まつてんだろ！このまま逃げてたらこいつちのスタミナがもちやしねえ。なんなら、多少無理しても強行突破するしかないだろ！…と、その時剣妖に一発、鞭のようく枝が彼の背を打つた。

「ぐあ……！…！」

剣妖はその場にしつぶせに倒れこむ。

『大丈夫か！？』

「へ……たいしたこと……ねえよ……」

すぐに追い討ちをかけるように、先を尖らせた枝が剣妖の背を目がけてとんで来た。

「誰が切つていいって言ったか？」

剣妖は体をひねらせ、それと同時に振った黒竜で枝を切つた。

『気をつけるよ、アイツの枝の先には毒素と吸血作用もある……』

「時間がねえ、セイズ……アイツの目の前に速攻で近づけるような何かいい案ねえか……」

このままだと剣妖はむかつてくる枝の餌食になる。そんな中、剣妖は枝を避け、切る、その行動を続けていた。

『……よし……剣妖、後ろ向け。』

「！？」

剣妖は少し驚きつつも後ろを向く。すると目の前からは剣妖むかつて直線状に枝がとんできた。

『そいつを縦にぶつた切れ！』

「てやあああつ！…！」

剣妖は迷いなく、叫びとともに切りかかっていった。

音はたたなかつた。スッと枝は縦に裂けるように切られたからだつた。

『今だ！！』

剣妖はもう大体分かっていた。すぐにわずかな反動を利用して、木のほうへ体の向きを変えて、木へむかって裂けた太い枝の間を走る。すぐに木の化け物の前に着き、彼は枝を踏み台のようにして跳んだ。

「食らいやがれ！！」

上空から黒竜が化け物へ降りかかるうとしたとき、枝が剣妖の真正面から、彼の胸めがけてむかってきたのだ。

『剣妖！！』

しかし剣妖はすぐに身をそらして避けた。が、それによつて空中での彼のバランスが崩れてしまつた。

「どどけええええ！！！」

ザシユ……

『しかしまあよくやつたもんだな。』

既に日は昇りきつてゐる。朝7：00くらいだう。剣妖はうとうとして木陰で休んでゐる。

「へ……まあな……」

あの時、剣妖は黒竜を木の化け物に突き刺したのであつた。運が良かつたのか急所を突いたらしく、一撃でしとめることができたのだった。

『……で、おまえはこのまま当てもない旅を続けるのか？』

「当てもないつて言うなよ……でも、とにかく旅は続ける。確かに当てとかそんなのはキッパリとは決まつたとは言えねえけど、とりあえず、今この世界に何が起きていくとか……知つておかなきやいけねえような気がすんだよ。（そもそもオレ、こんな時代なのに学校なんかに行つてなかつたからな……）

剣妖は立ち上がる。

『……と、言つても行く先が決まっていない旅など……』

「なあに、オレが言つてんのは『行く当て』じゃなくて『行つことの当て』さ。行く場所なら決まつていて。セリュアーラだ。』

剣妖は歩き始めた。

『セリュアーラ……か、そりやどこだ？ それに何があるとでも……』

「こつから真東、幸いあの化け物がいたとこが道の上だつたからな。この道をたどつてけば着く。あるものといえば……聞いた話なんだがセイズ、お前『インビンジ・ゲート』つて知つていてるよな。』

『……そういうことか。』

「じゃ、向かうとするか！』

さすがに剣妖も疲れはいるはずだが、どういうわけか体は全然大丈夫であった。

『それと、お前が心の中で思つだけで俺には伝わるんだからな。』

『分かつたよ』

剣妖はそれでも話している。

『……（心配だ……だが切裂剣妖、面白い奴だ。ふ……オレも契約してからこのようなことを思つなどな……）』

『どうかしたのか？』

『いや、別に。』

『……変な奴。』

『フン、お前に言われる筋合ひはない。』

剣妖は少し笑みを浮かべ、道を歩んでいた。

## 第10話 遭遇と…

歩き初めてもう昼にもなった頃だつた。

「なあ、この森つてそんな長いか？」

『…オマエそんなことも知らずに来たのか？』

セイズの声は少しあきれているようにも聞こえた。

「いや、その…父さんの知人（知人って言うのか？）から聞いた話  
じやそんな長いようなとこじやないって言うことだったんだが…」

『ああ。オレも何度か行つたことがあるし、この道で行けば…』

その時、剣妖もセイズも数メートル先が開けていることに気づいた。  
それを見て剣妖は走り出した。

「よつしや！ ようやく着いたぜ！ セリュアーラ！」

目の前には小さくとも街が広がつていた。セリュアーラ、エイレクスから北アメリカ大陸まで行く途中にある国で、エイレクスの隣国  
でもあるので案外すぐ着く国である。剣妖はたつた2日でも森の中で過ごしていいたので、少し新鮮な気分になつた。

「！！（何だ…今のは…）」

彼が進もうとしたとき、彼、そしてセイズがはつきりと感じた。

『妖気だ…』

剣妖はあきらかにこの妖気が殺意のあるものだと分かつた。すぐに腰の黒竜に手をかけ、迎え撃つ体制になつた。

「（来る…）」

彼は体をひねらせ、その勢いで黒竜を抜刀し、後ろにそのまま切り  
かかつた。

キイイイイイ

「な…？」

金属音が鳴り響く。黒竜と鉄でできたやや大き目の爪がぶつかつて  
いたのだ。剣妖の目の前にいるのは髪が白と黒にわかれ、その鉄の  
爪を右腕につけている赤い目の男だ。エイレクス人でないことは分

かつたが、彼は不思議に思つた。

「（何か違う、何か妖魔とは違う…）チツ！」

剣妖とその男はお互い後ろに下がる。すぐさま男は襲い掛かってきたが、剣妖はそれを黒竜でしのぐ。が、

「ぐ……（力が強ええ！？お…オレは契約したつてのに…）だあつ！…」

男に力では相性が悪いと思つた剣妖は、右に少し重心をかけ、男の力を利用して右に出て距離をとる。

「つああつ…！」

勢いをつけ、そのまま男に切りかかろうとしたその時、

『やめろ！剣妖！』

セイズの声が彼の脳裏に響く。

「（何でだよ！？やらねえとこつちが…）」

剣妖の言うとおり、男も剣妖にむかって来ている。

『とにかくやめろ…！』

「く…」

剣妖は左足で休息にブレーキをかけて止まる。もはや集中できなかつた。

「「何でだよ…？」」

「へ…？」

「あ…？」

剣妖は訳が分からなかつた。男もその場で止まつてているのだ。それもまるで剣妖と同じように…  
ましてや二人の声がかぶつた。

「オイ、てめえ…名は？」

男がにらむような視線で剣妖に問い合わせてきた。

「切裂…切裂剣妖だ…こういう時はお前から名乗るはずだが…」

「キリサキ…か…オレの名は撃双サイガ…」

『奴もまた、ひとりの契約者だ。』

剣妖はただ立つているものの、サイガという男はいつでも飛びかか

れるように構えている。しかし一人とも動かない……いや、動けなかつた。

「ティールガ……来ているな……」

「ティールガ！？？」

『おそらく奴と契約したものの名だらう。だが、今はそれよりも……』  
剣妖は黒竜を握る力を強め、そして目を閉じて集中した。彼もまた、  
サイガと同じものを感じていた。

「（5……いや、6体か……）」

「そこかああ……！」

サイガが近くの茂みへと飛びかかっていった。剣妖もその声に反応  
してしまった。

「な！？バカ……！」

剣妖にとつてこれは嫌なパターンでもあつた。彼の周りの茂みから  
3匹ほどの少し大きいハイエナのようなやつらが彼に向かって襲い  
掛かってきた。一匹目が爪で襲い掛かってきたのを何とか黒竜で防  
ぐことに成功した剣妖だが、2匹目が肩に1匹目と同じように襲い  
掛かってきたのを避けられず、服が少し破られ、血が出た。3匹目は  
服を噛みちぎつただけであつた。とりあえず1匹目の頭上を飛び越  
えて彼は体勢を立て直す。

「（クソッ……一人でこの妖魔どもを相手しねえといけねえな。）」

『やつらは下等の獣人族の1種だ。頭脳戦を征せば正氣はあるが……』

「（だが力はあるサイガつー男以下だ。何とかなる……！）」

剣妖はすぐに最初に襲ってきたやつにかかっていった。そいつも彼  
めがけて飛びかかる。それを狙っていたかのように、剣妖に少し笑  
みが見えた。彼は黒竜を空中で手から離し、通常の刀とは逆に、刃  
先が下を向くように持つた。そして、そのまま彼は手を上げ、いと  
も簡単にその妖魔の首を切り落とした。

「次い……！」

下から剣妖目がけて妖魔がかまえてる。彼はためらいなしにそのう  
ち1体の顔面目がけて黒竜を投げる。黒竜はその妖魔の額から脳天

を通つて貫けていた。

「ラスト…」

剣妖は刺さつた一体に飛びつき、黒竜をつかむ。血が吹き出たらし  
いが、彼が見ているのは最後の1匹のほうだった。刺さつた妖魔を  
足場に、剣妖は勢いづけて黒竜を引き抜くのと同時に最後の1匹を  
数回切りつけた。それなりの速さでもあった。最後の1匹を含め、  
剣妖は見事3体ともしとめた。

「（さて…アイツは…！）」

サイガも妖魔3体を倒していた。が、彼は倒れこんでいた。剣妖は  
急いでサイガのもとへ駆け寄った。

『こいつ…疲れているのでは…』

## 第11話 サイガと剣妖、明日に向けて

「！？」

朝、サイガは目が覚めた。彼はベッドの上に寝ていた。服が白いシャツになっていた。

「な…オレは…」

「お！ 目覚めたみてえだな。」

「てめえは…！」

彼の右手にはドアがあり、そのドアには剣妖がよりかかっていた。以前、サイガが会った時は別の服装であった。破れて血まみれになつた服は既に剣妖は捨てていた。

「つたく、お前大変だつたんだぜ。」

「ここはどこだ！？なぜオレはここにいる！？」

サイガは訳が分からぬようだ。また、少しばかり焦つているようにも見えた。それを見た剣妖はため息をつき、話しを切り出した。

「ここはセリュアーラの病院だ。お前は戦い終わつたらバッタリ倒れちまつて、オレがここまで運んできた。で、こここの医者に見せたら倒れた原因是、疲れと身体への負担だとよ。」

「オレはそんなもの感じねえぞ。」

「そういうやつもいるんだろうな…」

剣妖は苦笑いして小声でそんなことを言つた。

「何か言つたか？」

「え、いや、別に…それよりもお前どこから来たんだよ。」

「南の方からだ。10日間歩きっぱなしでな。」

『そりや疲れるな…』

剣妖は旅をしたとはいっても3日目、それにきちんと寝てはいたのでサイガに比べれば全然疲れていないほうである。時計の針はもう正午を越していた。

「…切裂…だつたな…」

「何だ？」

サイガが剣妖に声をかけた。田つきは真剣である。

「…てめえの旅にオレを同行させや。」

「な…」

剣妖は驚きを隠せなかつた。であつた時に襲つてきたヤツが、丸1日たたないうちに仲間になるとでも言つたらよほどの理由がない限り驚くのは当たり前だ。

「てめえもオレと同じ『契約者』だ。オレはてめえに勝負を仕掛けた…が、結果は引き分け…いや、てめえの勝ちだ。」

サイガが少し歯を食いしばつていた。

「だが、力なら断然お前が…」

「しかし、それ以外はてめえのほうが上回つてゐる。その上オレのその力までも利用するようなヤツだ。オレはお前を超える。そうでなきや気がすまん。ならそいつの側にいるのが一番だ。」

剣妖は目を閉じ、数分の間黙り込んだ。そして…

「分かつた。なら、オレの目的達成にも協力してもらひ。」

「…その目的とは…」

「インビンジ・ゲートの解放だ。そのためにオレはルクレイに行って情報の収集をするつもりだ。お前が起きる前にあるものを受け取つてきた。」

サイガはインビンジ・ゲートと言われても何のことだかさっぱり分からぬようである。剣妖は廊下のほうからキャリーケースを取り出した。

「こいつの中にはオレの父さんの知人が送つてくれたものが入つていてな。」

そのキャリーケースは、剣妖がジョーカーに頼んでいたものだつた。万が一、自分の身に何かがあつたときのためにセリュアーラまで送つてもらつたのだつた。

剣妖はそのキャリーケースを開けた。中にはかなり薄くコンパクトなパソコン、服、時計等のいろいろなものが入つていた。

「…旅にそのケース持つてくのか…？」

サイガにつつこまれたが、

「いや、パソコンと服はまたルクレイまで送る。」

と、剣妖はその質問にあつさりと答えた。

「…ところで気になつたんだが、てめえのいつその『インビンジ・ゲート』って何だ？」

「…お前、自分の契約した妖魔に聞けよ。」

「ティールガは熟睡中だ。」

剣妖はドアの外を確認した。幸い人は廊下を歩いていなかつた。

「…この話は本来してはいけないんだが…インビンジ・ゲートはこの世界と魔界をつなぐ異次元トンネルみたいなものだ。ただ、出現したり消えたりする。しかもそのタイミングや時間は一切不明だし、どこに開くか分からねえんだ。でも、もしその中に入れたら…」

「魔界へ行けるという事か…」

その後、沈黙が続いた。

しばらくして、剣妖は外に出た。どの道、今日中にセリュアーラを出発することは不可能であつた。セリュアーラはもともと昔はなかつた国で、埋立地が国となつてゐる。大きさもエイレクスの5分の1に達するかどうかだ。剣妖がサイガを運んだ病院は海辺に近く、剣妖の目の先には太平洋が広がつていた。

『で、こんなところで何をするんだ?少し店とかあるといつまでは遠いぞ。』

『(分かつてゐる。だからちょっとやつとくことがある。)』

剣妖は黒竜を鞘から抜いた。また、彼はキャリーケースの中から箱を取り出した。

『何だそれ?』

『剣を研ぐ道具が入つてゐる。こんな時しかできねえし、この前でちょっと妖魔の血がついたからな…』

『(あの男も爪研いでんのかな…というか刀つて別に頻繁に磨かなくてもいいと思うが…)\』

一方、サイガはとじゅと

「グ…（体が思つように動かねえな…やつぱし疲れてんのかオレ…）

』

『『そつなんじや ないのか？』』

サイガの脳裏に声が響いた。

「（ティールガ！？てめえいつの間に…）」

『ついせつとき起きたばかりだ…お前があの男につこうくのか…』

『悪りいかよ。』

『いや、不思議だと思つてな。』

『うして、また日が沈んでいった…』

## 第1-2話 インビンジ・ゲートの軌跡

剣妖が黒竜を研ぎ終わり、サイガの病室へと戻ってきたのはとっくに日が沈み、満月が空で輝いている深夜であった。

「（今日が満月だからあの妖魔が出てきたのかな…）」

そんなことを思いつつ、彼はサイガのいる病室に入る。

入った瞬間剣妖は呆然とした。サイガがいなかつたのだ。

「アッシュ…」

剣妖はどうするか戸惑つたが、一つの案が浮かんだ。彼はその場でじっとし、感覚を研ぎ澄ました。サイガの妖気を探つたのだ。

「（いた！）」

剣妖は病室を飛び出して妖気の感じるほうへ向かった。と、一つの部屋に明かりがついていた。その場所は…

「（せ…洗濯室！？）」

一体何の用があつたのか疑問に感じつつも、剣妖は洗濯室の中に入る。

「き、破裂！」

部屋の中にサイガはいた。手には血がついたサイガが着ていた服を持つていた。

「お前…それだけのために…」

「わ…悪りいかよ…！」

「…服ならオレの荷物の中に数着あるぞ。まだ送つてねえし、旅についてくんならいいくらでも貸してやるよ。じつちだ。」

サイガは無口になりつつも剣妖についていき、病院の外に出た。

「これとか案外に合うんじやねえか？」

剣妖はそう言ってサイガに一着服をさし出す。暗い中だったのでよく色などは分からなそうだったが、サイガはその服を受け取った。

「着れればいい。」

「えーっと…あと他に必要そうなものは…」

『特になさそりだが食料はどうするんだ?』この病院でも何も食べていなかつたろ?』

「(ああ、それなら心配しなくていいぜ。一応これは持つてくから...)」

剣妖は自分の胸のポケットから何かの小さなケースを取り出す。中から少しカラカラという音が聞こえた。

『何だそれ?』

「(来る前に持つてきたタブレット。これ一粒で人にしたら2日分のビタミンとかエネルギーとかそこら辺の栄養は補給できるんだ。)

『(...体にあまり良くなさそうな気がするが...)』といひで...

『着替え終わつたぞ。』

剣妖が振り返るとサイガが既に上下着替えて立つていた。

「早つ!...」

思わず剣妖も驚いたようだ。

「で、どうするんだ?」

サイガは剣妖の反応なんか無視して話を進めようとする。

「(切り替え早えよ) ... サイガ、お前持つものは?」

「そんなものない。爪はベルトにつけているからな。」

サイガはずつと爪も持つていたらしく、ベルトの後ろに爪を一つ、金属のバックルのようなものでつけていた。

「なら...」

「もう出る...のか。」

「ああ。」

「(うか、いろいろと迷惑をかけるかも知れねえが、オレは切裂いてめえを超えるためにめえについていくんだ...絶対に...)」

サイガの言葉には力が入つていた。周りが良く見えなくても、サイガの何かすごい執念的なものを感じた剣妖は少しだけひいた。

「(...なんか少し上から目線の気もするが) わ、分かつて。とにかく、先には進むぞ。オレにはオレの目的がある。お前にもお前の

目的がある。」

『剣妖、ところであそこにはいつ行くんだ?』

「(あ……ううん……今、行くか。)」

『てきとうだな……』

「何してんだ……切裂……」

サイガがすごく不自然そうな目で剣妖を見ている。一人で急に黙り込んで、うなずいたりしているのを見れば、不自然に感じるのも当たり前だ。

「え、あ、いや、別に……それより、一応寄つておきたいところがあるんだが……」

「……好きにしろ。時間は全部てめえに任せる。」

2人がやつてきたのは病院からさほど遠くはない山だつた。

「(こんなとこに、一体何の用が……)」

サイガはそんなことを考えつつも剣妖のあとについてきた。結局、何なのかはいまだに分かつていないうだ。

「ここの中だ。」

「何もねえじやねえか。」

剣妖の指差す先には何もなかつた。しかし、彼は黒竜を抜き、そこに向かつていった。

「お、おい!? 何する気だよ。」

「ま、見てろつて。」

剣妖は黒竜をかまえ、その先ほど指差した場所を切つた。ガラガラガラ……

「な……」

その場所から洞窟が現れた。こんなに暗かつたら普通の洞窟では分かるはずはない。が、この洞窟はサイガにも、剣妖が切つたところから岩が崩れ落ちる瞬間から分かつっていた。中から薄い紫に近い色の光が漏れたからだ。

2人はその中に入つていつた。

「やつぱし、思つたとおりだ。」

「な…何だこれ…」

彼らの前には紫色に輝くクリスタルの結晶のようなものが洞窟の周りに敷き詰められているような景色が広がっていた。

「さ、最初からこれを知つて…」

サイガは驚きを隠せなかつた。だいたい、こんなとこがあるのに何一つ傷がクリスタルの結晶のよつたものについていないと「のがおかしい。

「ああ、だが見たのはオレも初めてだ。」

「?どういうことだ…」

「さつきの荷物、あれを送つてくれたオレの父さんの知人から聞いたんだ。ここにはインビンジ・

ゲートだつたつていうことをな。このクリスタルみたいなのは妖蓄鉱しづくつて言つらしい。」

剣妖はさつきながら壁についている妖蓄鉱をとつた。意外にもろく、壁から妖蓄鉱はすぐにはがれた。

「とつていいのか?」

そう言つてサイガも自分の近くの妖蓄鉱をとる。

「別にいいとは思うが、価値はないぜ。」

剣妖は持つていた妖蓄鉱を投げ捨てた。地についた瞬間粉々に砕け散つた。

「（…にしても何でこんなのができるんだろうな）」

『魔界の大気は、一定量以上の窒素と一酸化炭素の間で化学変化を起こし、クリスタルのように結晶化する。インビンジ・ゲートから魔界の大気が漏れることによりこうなる。といつても、こっちの世界でいう一週間ほどで消えてしまうがな。もつとも、あの剣妖とかいう男は分かつていいよつたがな。』

「（…急に説明しに出てくんなんよ）」

サイガも妖蓄鉱を捨てる。

「で、ここに用はもうないだろ?」

「ん、ああ。一応妖蓄鉱を見ときたかっただけだし。  
2人は洞窟から外に出て次の街のルクレイにむかうことにした。」

## 第13話 迷いからの戦い

剣妖とサイガがセリュアーラをたつた1日で出てきてから、もう3日もたつた。歩いている途中で…

「… なあ、切裂…」

「な、なんだ…」

剣妖はギクリとする。

「もう3日も経つぞ。いいかげんこの薄気味悪い森をぬけてもいいんじゃねえか？」

サイガの声は低かった。セリュアーラからルクレイまでは1000キロほど、ルクレイに着くのにはまだまだが、セリュアーラから続いている森はせいぜい100キロくらいだ。そのくらいの距離なら3日もあれば普通はぬけているはず。が、剣妖たちはぬけていかつた。それから分かることは一つである。

「迷つただろ」

サイガは足を止め、はつきりと言った。彼の前を歩いていた剣妖も、言われて立ち止まつた。

「お、怒つて… る？」

『（そりや怒るだろ… ま、今はオレは黙つとくか）』

恐る恐る、後ろを振り向きながら剣妖はサイガに問い合わせる。少々彼の顔には苦笑いが浮かんでいた。

「あたりめえだろあおおお…！」

サイガの叫びは森の中で響いた。

「何でこうなんだよ！？ そもそもお前エイレクスから歩いてセリュアーラまで来たんだろ…？ セリュアーラは確かにこの森の真中にできた国だ。だったらもうぬけ出せるだろうが…！」

「あ、いやあ… 何で… か… な？… ま、まあそんな事は置いといてさ

…」

剣妖は少し笑みを浮かべ、軽く受け流そうとした。サイガの睨みは

先ほどのものよりも怒りが込められていたのは見て分かる。

「チツ！」

サイガは力を入れてかなり強く拳を握っていた。勝手にしろと言われていた剣妖にとってはいい迷惑である。

「（う…）…あ、あれ…！」

剣妖はとっさに自分の右後ろを指差す。そこは、ただの岩場のようだつた。微笑しながらサイガと目を合わせないようにしていたため、何かがそこに見えたようであつた。が、

「気をそらそうっていうのか…！？」

UFOと同じようなものだとサイガは思つたようだ。現に、一瞬だけそこを見てみたが、彼の目には何も入らなかつた。

「いやいやいや、違うつづーの、ほら、あの…洞穴…？」

「あん？」

サイガが剣妖の指差すほうを目を凝らしてよく見ると、確かにその岩場の中に洞穴があつた。しかも、あきらかに自然的なものではなかつた。

「…入つてみるか、切裂」

「ああ」

二人はその洞穴の前へとやつてきた。どこかへ突き抜けているわけではないらしく、外から見れば、中は完全に真つ暗だつた。

『妖氣を感じる』

「（オレも同じ事を考えていた…）この奥に、妖魔がいる（）」

『アイツは…』

「（とつぐに気づいているはずだ）サイガ、中に入るぞ」

剣妖はサイガへと呼びかける。サイガの目は洞穴の奥をじつと見ていた。

「サ、サイガ…何か見えてんのか？」

「え、いや、そういうわけじゃねえ…ただ、この奥には…」

サイガは妖氣以外の何か別のものを感じているようだつた。が、こ

ここまで来たというのに引き返すなど意味がない。奥に何があるのかは、二人とも知らず、だからこそ知りたかった。

「心配ない、それに、入んなきや何にも分かりやしねえよ…行くぜ」

「分かつた…！」

暗闇の中へと剣妖とサイガは走りながら入つていった。

「よく見えねえな…チツ、何か妙にじめじめしてやがる」

「それでも一本しか進む道はないみたいだ…（だからこゝぞ奇妙なんだがな…）」

穴に入つてから5分程経つた。

ピチャ…

「（水…）サイガ…」

「ああ、見えやしねえが、こゝは開けてるな…」

2人は小声で話した。そしてゆっくりと前に歩き出す。

「？…（今、何か足に違和感が…）」

「切裂…！」

「！？」

サイガが剣妖の服の襟をつかみ、左に引っ張つた。

「な、なにすんだ…」

剣妖はその時に気づいた。自分のほおが、すじが入つたように切れていったからだ。そして彼がサイガの後ろを見ると、かすかだが何か細いものが壁となつている箇所に刺さつっていた。

「…トラップつてわけか…」

「残念ながら違うな」

剣妖のその声に応えるかのように何者かの声が聞こえてきた。

「！？」

「クク…今見せてやるよ」

その直後、剣妖たちのいる場所より少し先の上が崩れて光がさしてきた。そしてその先にいたのは…

「てめえ、何者だ！？」

手足計8本をもつ人と同じサイズの蜘蛛のよつたな妖魔だった。

「ククク、名乗る必用もないと思つぜ…」

「何…」

剣妖は黒竜に手をかける。

「お前たちはこれからオレの栄養源になつてもうつんだからな！」

「ハッ、そんなことになるオレだと…」

剣妖が黒竜を抜きかけたときに背後からサイガが飛び出していった。

「相当自信過剰だな！」

「あ、おい、サイガ！」

剣妖を無視してサイガは爪で蜘蛛の妖魔に襲い掛かった。しかし、

「ぐ…な、何だ」

遠くからでよく剣妖には見えなかつたが、サイガの両腕が動いていない。まるで何かに縛られて止められているようだつた。

「（…まさかアイツ…）」

剣妖はすかさず黒竜を片手にサイガとその妖魔のほうへと走り寄る。

「来るな切裂…！」

ピッ…

「（やはりか…）」

剣妖も動けなくなつてしまつた。手首、足首が完全に何かに結び付けられたように止められているような感覚が剣妖にはある。

「まさか自らかかつてきてくれるとはな…」

蜘蛛の妖魔は見下すような眼で2人を見ている。あきらかに余裕の表情を見せていた。しかし、剣妖も忠告をうけて、それでもなおかかつてくるほどのバカではない。

「オレの黒竜をなめるなよ…」

「…何…」

剣妖は小指で黒竜の柄頭つかがしら（柄こと持ち手がわの先端のこと）をはじめた。黒竜が宙を回転しながら落ちてくる。

「首も捕らえとけばよかつたのにな！」

剣妖は口で黒竜の柄を受け取つた。そして黒竜で左手首から右手首

まで刃先をわたらせる。すると、「ブツン」という音がして、剣妖の両手はガクッと落ちた。

「予想は当たつてたみてえだな……」

『（もし違つてたらどうしようもなかつただろうが……）』

剣妖は右手に黒竜を持ち替え、両足の周りを手のとうに刃先をわたらせた。そのときにも手のときと同じような音がした。

「ほう……単純なバカではなかつたか……」

「……（単純なバカ……それつてオレのことかああああ！！）」

サイガはそのまま動けないでいた。剣妖も蜘蛛の妖魔もサイガのことは眼に入つていなかつた。

## 第14話 蜘蛛妖魔との戦い

『氣をつけるよ、剣妖』

「（ああ、あいつがまだどこかにトラップはってるかもしんねえからな）」

剣妖は黒竜をかまえる、が、

「…どうした？かかつてこないのか？」

「……」

剣妖はその体勢のままずつと立っている

「（切裂のやつ…動けるようになつたものの、やはり自分からは出て行かないか…）」

「フッ…まさかこっちが向かつていいくのを待つてているのか？…どうせ、その足取りをたどつて来ようとでも考えているんだろう？…だが…」  
そう言つうと、蜘蛛の妖魔は少し身を引き、剣妖にフッと息を吹きかけた。しかし、実際にはただ息を吹きかけたわけではない。だが、剣妖にもそれは分かつた、いや分かつていた。

「どうせ、そう来ると思つたぜ…」

剣妖は体を左に少しだけ寄せた。しかし、彼の右の頬にはスッと浅い切り傷が入つた。

「ハッ、お前みたいな蜘蛛野郎なら、そうやつて糸を武器のようにして、飛ばしてくることくらい検討がついてたさ、で…」

「つたく…こうするなら早めに俺に言つといてくれつづーの…」

剣妖の後ろからサイガの声がした。サイガは手が動くようになつていて、爪で足にかけられた蜘蛛の糸を切つていいようだ。剣妖は初めからサイガにからまつていた蜘蛛の糸をほどくつもりだったのだ。

「悪いいな、『敵を欺くにはまず味方から』って言つだろ？

『おまえな…』

「フッ…だが…一人になつたとしてもこちらから見れば変わりはない…」

確かに一人になつたとはいえ、あまり意味がない。動けばまた妖魔の蜘蛛の糸に引っかかってしまうだけだ。

「…よし、サイガ」

剣妖は迷いなくサイガに話しかける。

「あ？」

グツ

『おい…剣妖、お前…まさか…』

剣妖はサイガの裾をつかみ、そのまま彼の前へと引き出した。

「うおっ…！？切裂…てめえ…！？」

無論、サイガは再び蜘蛛の糸にからまられて動けなくなってしまった。しかも、罠などではなかつたため、乱雑にからまり、さつきよりひどい状態だ。幸い、転がるようになつたので、サイガの体に負傷はなかつた。

「上出来つ！」

剣妖はサイガに対しガツツポーズをした。

「何が『上出来つ！』だ！」

「ほつ…仲間を助けたのはこうするためか…？」

蜘蛛の妖魔の声に剣妖は黒竜を再び素早くかまえた。

「ん？ああ…ま、そんなとこ…かな（ホントは今考え付いたんだけどな）」

「（あいっ…）」

「さてと…お前、強いんだろ？」

剣妖の口に少し笑みが浮かぶ。余裕…とはまた違つようだが…

「どうかな、お前の基準で変わるが…」

剣妖は片手に持つた黒竜で蜘蛛の妖魔を指した。

「オレにとつての強さの基準なんかねえ、だが…やっぱ、お前実力はある気がする、それにトラップみたいなのもあつたけど、べつに卑怯でもなさそうだ、なんとなく、だけど分かる、どうやらオレは、一回でもいいから、今の自分を確かめられるような妖魔と戦つてみたかつたみてえなんだよ」

「手加減はできないぞ」

そう言つと、蜘蛛の妖魔は口から糸を出し、そいつを手で掘んで長い棒のよつなものにした。薄暗いが光沢があるよつに剣妖には見えた。

「糸だつてまとめて妖氣を送れば剣になる、そして…」

キンッ

蜘蛛の妖魔がその剣を振ると、刃先が伸び、剣妖に向かつてきたの

だつた。が、すかさず剣妖も黒竜で受け止めた。

「ぐつ…（こ、こいつの剣…こんな形で奇妙な動きする上に、ここまで力が入つてゐるなんてな…）」

剣妖は力を入れて蜘蛛の妖魔の剣をはじき返す。妖魔の剣はスルスルとまた戻つていつた。

「おもしれえな、それ」

「お前が勝つたらくれてやつてもいい、ただし…」

『剣妖！』

「…！」

キンッ

再び剣が交差する。剣妖は瞬時に反応できた。妖魔の剣が彼の背後から向かつて來たのだった。

「ほう、よく氣付いたな」

「けつ、このくらいできなきゃ剣なんて持つていねえよ…剣は貰うからな、ついでに勝つたら道も教えてくれよ」

剣妖は力を入れ、その瞬間、彼は一瞬のスキに蜘蛛の妖魔の前に駆け寄つた。

「！（速い…まさか…）グ…だが甘い！」

蜘蛛の妖魔も自分の刃先の伸びた剣を横に引いた。だが、剣妖はすぐくに黒竜で剣を止めた。そして…

「なかなかやる…が、甘いのは…てめえの方だ！」

すぐさま剣妖は、蜘蛛の妖魔の足を蹴り、そのスキに後ろに回つこんだ。そして…

「もらつた！」

パシイ…

剣妖は黒竜で蜘蛛の妖魔の剣をはじいた。そしてすぐに黒竜は蜘蛛の妖魔の首にあてられた。

「フン、お前の勝ちだつたか」

剣妖は黒竜を鞘さやに戻して蜘蛛の妖魔の正面に立つ。

「それでもねえよ、オレだつて、最初のお前の不意打ちは回避できなかつたかもしんねえんだし、な？」

『…あのくらいは気づけるようになれ、それにあたかも気づいたような言い方をして…』

剣妖はセイズの言葉に苦笑する。それを見ていた蜘蛛の妖魔は気づいた。

「！…そうか、お前は契約者だつたのか

「あ…そういうや言つていなかつたな」

剣妖はそう言つて、さつきはじいた蜘蛛の妖魔の剣の前に立つた。  
「とりあえずオレの勝ちなんだろ？つつーわけでこの剣貰つてくな」

そう言つて、彼は蜘蛛の妖魔が使つていた剣を手に取る。

「勝つたのはお前だ、好きにしろ」

剣妖は少し笑みを浮かべた。

『…おい、後ろ』

「（ん？何だよセイズ…）」

ふと振り返ると、そこには相当憎しみが感じられる目で剣妖を見るサイガが、いまだに蜘蛛の糸にからまつっていた。

「あ…」

「破裂…もう解いてもいいはずだよな…」

「あ…ああ…そ、そうだな」

剣妖はサイガのほうに駆け寄る、と

「そういえば…」

唐突に蜘蛛の妖魔が話し始めた。

「何だ？」

剣妖は、その声を聞いてまた立ち止まつた。

「（切裂いいいいいい！！）」

『サイガ…落ち着けつて』

その様子を見ていた蜘蛛の妖魔は

「別にそう大した話ではない、そいつの糸を解きながらでもいい」と言つた。蜘蛛の妖魔は気づかつたつもりだが、サイガには少しイラッとしたようだつた。

剣妖がサイガの糸を解き始めるのを見て、蜘蛛の妖魔は話を始めた。  
「実はここ最近、この付近にいる人を襲つた妖魔が瀕死状態になつてゐるみたいでな…」

「お前がやつたんじゃねえの？サイガ…」

「あ？オレだつたら瀕死どころじゃなく殺してゐる、それにこつちまでオレは来てはいなからな」

様子を見て、蜘蛛の妖魔の話が再び始まつた。

「別にその妖魔をどうとか言つわけではない、人を襲つてやられているんだからな」

「で、何が…」

「…ただ気をつけろというだけだ、ま、もしかしたらお前と同じ契約者なのかもな」

『契約者…もしかしたら何があるのかもな…』

そういうしながら蜘蛛の糸を解いていると、いつの間にか終わつてた。

剣妖とサイガは洞窟の前まで來ていた。蜘蛛の妖魔も後ろにいる。

「初めにお前が言つていたが、本当に卑怯で醜悪な妖魔もいる、そういうやつには気をつけろよ」

『案外いいやつだな、お前』

「フン、戦つてすつきりしただけだ」

「行くぞ、切裂、道も聞いたことだしな」

サイガが先に洞窟から出る。

「じゃあな！剣、大切にすっからよ」  
剣妖もサイガに続いて後から出ていった。

## 第15話 抜け出した…が

洞窟を出た剣妖とサイガは再び森の中を歩いていた。日が沈みかけ、辺りは既に薄暗くなつていた。

「…あいつの行つていた方向だと…こっちであつてるんだよな？」  
『『やつなるな、だが…もつそろそろ森は抜けてもいい頃じゃないかと思うんだが…』』

洞窟を出でから剣妖とサイガはもう5～6時間くらい歩いている。

『…それと、オレと話すときは声に出でなくていと何度言えれば…』  
「分かつてゐるつて（ただ…な…）」

剣妖はチラツと田を後ろのサイガに向ける。

『お前…』

「（だつてよ、あんだけ散々殴られたんだぜ？それなのによ…）」  
剣妖の頬などは少し青くなつてゐるところがあつた。

『お前…あの洞窟に入る前のことを少しでも考えてんのか…？』

「（あ……）」

そつ、既にサイガの怒りをかつていた剣妖がこうこう田にあつてゐるのはおかしいことではない。

結局、剣妖はその他に何も言つ事ができなくなり、一人とも無言で歩いていた。しかし、さすがにもう夜になつてしまい、辺りもかすかに明るさがある程度になつてしまつた。

「な、なあサイガ、今日はもうこのくらいで休もうぜ…」

話しかけたのは剣妖のほつからであつた。

「…分かつた」

「フウ…」

剣妖はサイガの了承に少し落ち着いたようである。そして持つてきていたカバンをおろす。ちなみに、食料などというものはない。どうか、持つてきたものを食い尽くしてしまつたのだ。原因はサイ

ガで、病院のときも何も食べていなかつたことなどが原因であらう。

しばらくして、剣妖は既に寝たあと。が、サイガはまだ横になつて起きていた。

『…サイガ、お前はあの剣妖という男をどう思つてゐるんだ…』

「（あ…？…ムカついてんに決まつてんだろ）」

『いや、そういう訳では…』

「…」

翌朝

剣妖とサイガは早朝から出発した。しかしながら、サイガは寝付けなかつたようで、すつとつじく眠そうだ。また、出発してから、そう時間も経たずに森から広い場所へ出た。

「なんか…この森をさつと脱出するために朝早くに出てきたつてのに…」

『ま、そういうこともあるわ』

「…（そういうえば、あの切裂と戦つた妖魔…森に妖魔がいると、いや契約者か…）」

と、いつに無く真剣な眼差しで物事を考へてゐるサイガを見て、剣妖は不自然に思つた顔をしている。まあ、そんなことを言へばまた機嫌をそこねるかもしれないと思ったのか、剣妖は

「それでも、大草原つて感じだなこりや…」

わざとらしくも見えるが、手を額にあてて、遠くを見るよしなじぐさもしていた。が、本当に草原が広がつてゐるので、サイガは特に気にはならなかつたようだ。

「…切裂、あの蜘蛛の妖魔がお前に言つていたこと…結局出会いはしなかつたが…」

「（あ、そのこと考へたのか）ああ、あのことか…確かに気にはなるがな…妖魔だつたら普通つてわけじやねえが別におかしくはな

「話しだしな…」

「ハン、それもせうだな、まずはルクレイに向かうんだろ?」

「そう、迷つたりといろいろあつたが、一番の田的はルクレイに向かうこと。今、ようやく森を抜けたということは、とりあえずルクレイに一步近づいたということだ。」

「しつかし…やつぱし遠じだらうな…」

剣妖が肩を落としてため息をつく。

『今からそんなこと言つてどうするんだ…』

「先に進むぞ、遠くても進まねえといけねえんだろ」

「（にしても本当にあの妖魔が言つてこたことは本當なんだらうかな…）」

『まあ、本當だと思うがな』

と、そのとき

「……サイガ!」

「ああ、切裂! 妖氣だ!」

2人とも妖氣を感じ取っていた。が、辺りを見回すもこれといって強く感じる場所はない。

「一体どこにいやがんだ…」

「（）で剣妖にはある案が浮かんだ。

「…（）いうときつてのは…いや、まさかな」

そう言つて剣妖が見たのは空だ。剣妖のまさかはあたつていた。空にはあきらかに普通ではない鳥が飛んでいた。

「んな…あのデカさ…怪鳥じやねえか…」

「軽く体は4メートルくらいはあるな…！？」

あぐまで体、翼は合わせて10メートルはある。

「お…おい切裂、これって妖氣高まつているよな…」

と、その瞬間、そのサイガいわく「怪鳥」は空中から剣妖たちのほうに向かって猛スピードで降下してくる。

「チッ（こいつがその妖魔なのか…？）」

剣妖はすぐさま黒竜に手をかける。また、サイガも腰から爪をはずして両手につける。

しかし、それは無意味だった。

「うあつ…！」

怪鳥が地から5メートルくらい離れたところに来た瞬間の風圧で剣妖とサイガは吹き飛ばされて倒れこんでしまったのだ。

「サイガ…！」

怪鳥は、低空飛行でサイガの方へと足で襲い掛かる。

「くつ…！」

サイガは怪鳥の襲い掛かってきた足を両方の爪で受け止める。

「う…」の野郎…」

怪鳥の爪はサイガの爪をギリギリと絞め上げていく。

『『剣妖…！あいつからもつた剣を…！』』

（蜘蛛の糸でできる剣のことか…）

剣妖は黒竜から手を離し、ベルトにくくりつけてあつた蜘蛛の糸で作られた剣を抜き、両手で構える。

「（…つてどうすればいいんだよ…？）」

『『あいつはさりげなく妖氣を送つて…』』

（つまり手に神経を集中するとかそういう感じか…よし…）

剣妖は右手だけに剣を持ち替え、

「（狙うのはあいつの翼…！）行け…！」

思いつきり剣を振つた。すると、その剣先がかなりの勢いで伸びていき、怪鳥の右翼に巻きついた。

「ぐ…（力仕事は苦手なんだああ…！）」

剣妖は再び両手に蜘蛛の糸の剣を持ち替えて、引く。

「……（クソツ……）」

サイガはその隙に抜け出し、怪鳥は空中へと上がっていく。剣妖はまずいと思ったのか手の力を抜き、蜘蛛の糸の剣は元の場所に戻った。

「やつぱりあいつが忠告された奴か……」

剣妖は上空を飛ぶ怪鳥を見て、そうつぶやいた。

「いや、違う……」

「！？……どうこうことだ、サイガ……？」

「確實に奴には『殺氣』がある、あんな殺氣がある野郎が、殺さないでいるなんて考えられねえよ……」

攻撃を受け止めていたサイガには分かっていたようだった。剣妖もそれに納得したようだ。

『確かに……蜘蛛の妖魔は人を襲つた妖魔とも言つていたしな』

「（まあ……じゃあ、何であいつは生きてんのか……って思つけどな……）

剣妖は肩を落とした。一人とも空を見上げる。と、どうやら怪鳥も彼らの方を見ているようだ。

「こりやあターゲットにされたな……」

「ケツ……空飛んでつからそう簡単には攻撃できねえ……か……

と、その時

「！？（まさか……）

「！？妖気がまだ他に……」

二人とも後ろの茂みから妖氣を感じた、そして振り向くところ

ガサッ

「ようやく見つけたわ……あれ……ど、どうやら……様……？」

## 第16話 草原の中、少女の空

剣妖とサイガが後ろを向くと、そこには一人の女がいた。金髪で、緑色の目、服はベージュのワンピースのようなものだった。そして、彼らが感じた妖気はその女が放っていたものだった。

「あ…あなた達は…」

「どうやら…お前がここらの妖魔を倒していたみたいだな（…なかなかいい女の子じやん）」

剣妖はその女性をじつと見る。外見的には剣妖やサイガと同年齢くらいに見える。とはいっても、事情や何かがなければこんなところに人がいるはずがない。

「あなた達も…妖気を持っているの…？」

「やつぱり…お前も契約…」

サイガがそう言いかけたとき、3人の周りにまた風が吹いた。怪鳥が、再度上空から襲い掛かってきたのだ。

「（！）…来るわ！」

「ちょっと待て、お前は…ぐつ…」

剣妖は黒竜を今度は抜き、右手で持つて構える。が、その女性に声をかける途中で風に吹き飛ばされそうになつた。

「わ、私の名前は楓香…深理楓香よ、詳しい自己紹介はあと、今は…」

一応、3人とも吹き飛ばされることはなかつた。既に頭上には怪鳥がいる。

「分かった…」

「チッ…こいつの腹でも裂かなきや氣が済まねえ…！」

サイガはさつき襲われていたからか、怒りを表して怪鳥に飛び掛つていつた。

「サイガ！（あの野郎！）」

剣妖も怪鳥に切り掛かろうと怪鳥に向かつていぐが、怪鳥は勢いよ

く羽ばたきだして、また上空へと戻つていつてしまつた。

「くつ！」

『また飛ばされるぞー!』

しかも、さすがにそのときに起きた風には耐えられなかつたため、剣妖とサイガはまたも飛ばされて地面に叩きつけられた。

「あの鳥めえつ……！」

「！？ あいつがいない…」

そう、あの楓香という女性がいなかつたのだ。剣妖は辺りを見回したが、やはりいなかつた。しかしどういうわけか、小さくなつていたが彼女の妖氣を感じていたのだ。

「なあ……切裂……たぶんいたぞ…」

その様子を見ていたサイガが、剣妖に声をかけた。

「！？ どこに…」

剣妖がサイガの方に目を向けると、サイガは人差し指を立てていた。

「空…！？」

剣妖が空を見上げると、空には怪鳥の他にそばにひとつだけ人影が見えた。だが、少し普通の人影とは違うようにも見えた。

『剣妖、おそらくあの人影が…』

「間違いねえ……だろうな、あいつが…たぶんあの女だ…ただ、あれは本当に…」

剣妖がそういうのも無理はない。空を飛ぶ人影は、空中に浮いているのではなく、明らかに人にはないものの『翼』を背に飛んでいたからだ。だが、剣妖とサイガには同じ契約者であつても、自らの体に何らかの変化が起きてはいない。

「あいつは一体何なんだよ…契約者とかじゃなかつたのか…？」

『…いや、あいつは契約者だ…というか、むしろそうでなければつじつまが合わない』

「（…と、とにかく契約者ではあるのか…）でも…オレらどうこもできないな…」

下で剣妖とサイガが何もできないでいる中、上空では楓香と怪鳥が対峙していた。

「今までずっと探してたのよ… ょつやく見つけたわ…」

楓香は羽を羽ばたかせ、怪鳥に高スピードで近づき、すぐさまその頭に蹴りを喰らわせた。が、どうやら怪鳥にはダメージになつていよいようだった。彼女は、それを見てすぐに後方へと下がった。

「…?」

すると、その直後の隙をついて怪鳥が楓香に向かつて口を開き、先ほどの楓香よりも速いスピードで向かつってきた。

「くう…」

楓香は空中で体勢を変え、オーバーヘッジキックのよつて怪鳥の下の口を蹴り上げた。しかし、そのためかバランスが崩れてしまい、地上から1.5メートルほどのところまで落ちてしまつてからよじやく体勢を整えた。

「おい…（やつぱりな…）」

「え…?」

楓香が振り向くと、そこにいたのは剣妖とサイガであつた。

「あ…」

「俺がサポートしてやるよ」

「（クッ… オレはまたすることがねえのかよ…）」

サイガが剣妖を睨んでいるが、視線には気づいたものの、かまわずに剣妖は楓香に向かつて話しを続ける。

「じ、事情がありそうなのは分かつた、が、このままじゃ…お前だけはどうにかできると思つてるか?」

剣妖はついつきの怪鳥と楓香の戦いを見ていて、圧倒的にパワーで負けている上にバランスが取れなければ空で戦つても意味がないということを悟れたようだ。

「…でもあなたたちは…」

「空飛べねえってか?安心しな、オレにはこれがある」

そういうつて剣妖はあの蜘蛛の糸の剣を取り出して振り、すぐ近くに

あつた木の上のほうまで伸ばし、そこに巻きつけた。

『…お前一瞬にして使い慣れていないか?』

「(まあざつとこんなものぞ、よつと)な?』

剣妖はすぐに剣の伸びを戻した。と、上から楓香が降りてきた。近くで見ると、羽は片翼で2メートルはあり、いがいに大きかつた。

「その剣すごいわね…」

楓香は剣妖の持つていた蜘蛛の糸の剣を見ていた。そんなものを見たこともないような目で見ていて、やはりあの蜘蛛の妖魔との関わりはないことがはつきりした。

「(いやどう考へてもお前の羽の方がすごい)…ってかやつぱりお前も契約者なんだな…」

「そうよ、といつてもあいつの力はすごいわね…今までの奴らみたいに向こうの攻撃を利用してやるなんて結構無理があるわね…」と、途中から独り言になつて行きながらも、楓香はいろいろ考えているようだつた。

そんな中上からは怪鳥が、また3人に迫りつつしていた。

## 第17話 勝利の頼みはサイガ

「とにかく、オレのこの剣でアイツを止め……」  
剣妖が考えながらブツブツ言つている楓香に話を切り出した、と思つたら途中で声が出なくなつてゐる。

「？何……」

「い……いや……あれ……」

剣妖はさつき話を切り出すときに怪鳥の方を指差した。が、そこで彼はとんでもないことに気づいてた。彼の指差す先には何もないく、その真下へと怪鳥が降下し、かなりのスピードでこつちに向かつて来ているのだった。無論、楓香とサイガも気づいた。

『どうするんだ剣妖！』

「（いや、もうやるしかないだろ）サイガ！お前はアイツの真正面に立て！」

「なつ……てめ、オレに指図すんな！大体、それって死ねって意味じやねえか……」

まあ、確かにサイガの言つていることが正しい。とはいへ、簡単ながら剣妖にも策がある程度は浮かんでいる。

「違う！オレのこの……えーっと……ス、スペイダ・セイバーであいつの動きは封じる！」

この時、剣妖は何気にあの蜘蛛の妖魔から貰つた剣に

「スペイダ・セイバー」という名前を付けた。しかも、即席であつた。ちなみに、蜘蛛妖魔が使つていたものは「刃」があつたが、剣妖が貰つたこつちの剣は「刃」がない。それは使いやすさと同時に、敵を切れないというデメリットであるが、既に黒竜を持つ剣妖にとつては支障はなかつた。

「……それでもあのスピードじゃ止められねえ！」

「……いか、それ以前に勢いよく引かれて剣が切れてしまつであろう。」

「だから、その、ふ……ふう……」

「楓香よ、私に後ろから更にあの鳥を押せてももうつてわけね…」

「剣妖」

剣妖は覚えていなかつたようだが、楓香は剣妖の名前をしつかりと覚えていた。

「で、止めたらあとはどうすつかくらには分かるよな… オレらは手が空いていい」

「…ああ、分かった…じゃあ早速頼むぜ！」

サイガは剣妖の言葉を聞いたあと、考え付いたことにニヤリと笑みを浮かべ、今も口元が笑つっていた。

その間、楓香は急いで上昇し、怪鳥の後ろへと回り込もうとしていた。現在、サイガがさつきの場所に一人で棒立ちし、剣妖はその少し前にいる。そして、剣妖の目の先には楓香がいて、彼女はサイガの方向に向かつて飛んできている怪鳥の後ろをとつていた。どうやら怪鳥はしつこい性格のようで、サイガを狩ることができなかつたせいか、またターゲットにしているようだつた。が、それが剣妖たちにとつては好都合であることに違ひはない。

怪鳥が剣妖から少しあなれたところに来た時に、彼らも動いた。

「てい…！」

まずは楓香が怪鳥の尾をつかみ、全力で羽ばたいて引く。しかし、やはりそれだけではどうにかならない。すかさず剣妖がスパイダ・セイバーを伸ばして怪鳥の首に巻きつけ、更にその先を自分のもとに戻し、左手でつかんだ。

「くう…！」

剣妖も楓香もかなり力を入れて踏ん張つてゐるが、実はそこまで怪鳥のスピードは下がつてない。一人とも怪鳥に引きずられているとなると、やはりサイガだ。

「（…確かにスピードは落ちてつけど…これをどうしろと…）」

剣術であればそれこそ「居合」などの対処法があるのであらう。

ただ、それをサイガの持つ爪でやるのは結構無理がある話だ。しかし、もう彼の目の前には怪鳥が迫ってきている。

「！」「この野郎！！」

そう言つたのは剣妖だ。そして同時にザシユツと何かが切れた音がした。その瞬間、怪鳥が叫び、サイガの目の前で状態が起き上がつた。見ると怪鳥の右翼の付け根に大きく切り傷がついている。実は、剣妖がこのままではまずいと思い、スパイダ・セイバーの持ち手よりと先端を縮めて怪鳥に急速接近し、左手で普通とは違つた抜き方で剣を抜き、それこそ「居合い」のよつな感じで怪鳥の右翼の付け根に切り傷を負わせたのだ。ただ、さすがにサイガもただのチャンスだとしか今は考えられていない。

「！（今だ）つおらああ！！！」

サイガはその隙にかけ、怪鳥の腹めがけて飛び、思い切り爪を装備した両手を上から振り下ろし、怪鳥の腹を引き裂いた。

「尻尾巻いて逃げやがつた……ってことでいいのか？」

怪鳥はどこかへ飛び去つていった。あのサイガの一撃は相当な痛手になつたようであり、飛んで行く姿もフラフラとしていた。結局、退治はできたものの完全に息の根を止めることはできなかつたのだ。サイガは座つて自分の爪を研ぐ道具でついている怪鳥の血を落としているが、剣妖は息を切らして横になつていて、楓香にいたつては完全に疲れきつたようで大の字になつて倒れている。

「ハア……たぶん……な……よし！」

サイガはそう言つて立ち上がつた。

「何が『よし！』だよ」

「何つて……また歩くに決まつてんだろ……」

時間帯的には夕暮れ、今までからしたらまだまだ歩いてもいい時間帯だ。が、剣妖もこんな状態なので……

「んな……無茶言うなよ……」

「えーまだ歩くのぉー…」

「当たり前だろ…ってお前は違つだろー」

突如、話に入り込んできた楓香にサイガは指を指してつゝこんだ。すると、楓香がよれよれと立つた。

「どーせ、あなたたちはルクレイでも田舎してるとんでもしょ？」

「そりやそりや…」

話を聞いていて、楓香がマジで言つてこるのでと気づいた剣妖も加わる。

「じゃ、私も一緒に行くわよ」

「…え？」

剣妖もサイガもこゝで声がそろつた。

「別に特に私にも行き先なんてないし、ここで一生過ごすなんてどうかしてるしね…」

『やつぱり…こゝにこゝに住んでいたのか』

「（そうみたい…だな…）」

いつして楓香がともに旅に着いてくることになつた。さすがに「やめたほうがいい」とは言われたが、彼女が押し通したので、別にそこまで止める理由もなかつたため、同行することになる。どうやら楓香の話によると彼女はルクレイへは一度だけ行つたことがあるらしいので、道を詳しく教えてくれるとのこと。しかし、剣妖と楓香の一人が疲れていたということで、結局この日は出発することなく、野宿となつた。

その夜のこと

「（なあセイズ…）」

『なんだ?』

田は完全に沈み、楓香が取つてきていた果実で空腹を少し満たした後のことであつた。

「（楓香ってエイレクスの名前だよな…深理もエイレクスの苗字だ

し…）』

『それがどうかしたのか？』

「（いや、あきらかに楓香はエイレクス入じやねえだろ…）」

『わからないぞ、ハーフ×ハーフのクオーターだつたりしたり…』

『…いや、それでもおかしいか…』

「（…ま、とにかくそこまで関係あることじやあないけど、気にはなるんだよなあ…）」

こうして旅の仲間は3人となつたのであつた。

## 第1-8話 契約といつもの（前書き）

今回の話は若干説明が多く、そのため会話が少しありです。

## 第1-8話 契約といつもの

さて、あの怪鳥が襲つてきて楓香が仲間になつた翌日、3人は楓香に誘導してもらいながらルクレイへと向かつていった。が

「絶対ずるい」

楓香を見て話を切り出したのは剣妖であった。

「えーそう?」

「昨日、歩くつて言つてたじやねえか!」

「だつてえ…やっぱり走るのは疲れそつだし…」

なぜこいつなつてゐるのか、簡単な話だ。楓香は飛んで進んでいるからである。飛ぶことは疲れはするが、さすがに走るのよりは楽らしい。

『ま、別にいいんじゃないか?』

「うう…」

すると、楓香はかなり高い位置まで飛んでいた。

「?何してんだ…あいつ」

楓香は剣妖とサイガからはよく見えないが、辺りを見渡していたようで、すぐに元の場所に降りてきた。

「」の道からなら夕方くらいまでには着くと思つわよ

「（道を確認してたのか…なんかせりげなくこいつこいつとやらられると飛ぶ」と否定できねえな…）」

そうして日が沈みかけてきたころまで歩くと…

「あ!」

「はあ、はあ…ようやく…着い…た…のか…」

「やつ…た…」

ついに3人はルクレイへとたどり着いた。しかし、楓香は完全に余裕であるが、サイガも剣妖も疲れきつてゐる。理由としては、一切食事を取つていない、休みなし、時々走つた…であり、更に剣妖に

いたつてはおそらく昨日の疲れと、もともと体力がないといつものもある。

とこ「う」とで、3人ともルクレイの中へと入り、とりあえず休めそ  
うなところを探すこととした。

「都市部の入口だし、なにかあるとは思うけどね」

楓香はこんな感じで元気だが、剣妖もサイガも歩くことすら辛い  
ようである。

「宿屋でもカプセルホテルでも何でもいいが…」

「…そういうえばこの前の病院はどうかできたのかもしんねえが、切  
裂、お前金持つてんのか？」

「金つていうか…これ…」

剣妖が取り出したのは一枚のカードであつた。

「…クレジットカードか、なるほどな」

「そ、ジョーカーさんから預かったものさ、結構金はあるらしい…」  
剣妖はそのカードを財布にしまった。

「…ジョーカーさん？」

「あ、ああそつか…楓香は知らねえんだもんな…」

「ま、休めるところ見つけたら話してや…」

そんなこと言つて歩いている間に彼らの目の前にホテルと書いてあ  
るビル的な物が現れた。3人とも入口の前に立つて確認しているの  
で間違いない。

「ホテル…だな」

「ホテル…ね」

「…つて何立ち止まつてんだよ、入るつぜ、別に何の心配もねえだ  
ろ…」

ということでお3人は入ることに。ちなみにチェックインは剣妖に全  
て任せられた。

さて、なんだかんだでとりあえず部屋を確保でき、剣妖とサイガは

休むことにした。が、楓香はたいして疲れていなかつたので…

「ねえ、少し町の中とか見てきていい？」

「いや、別にかまわなが…」

「そう…よーし…」

と言つて、楓香は部屋を飛び出そつとした。

「おー！」

と、剣妖が彼女を呼び止めた。

「え…」

「こいつを持つてけ…」

剣妖は先ほどの財布を楓香に渡す。

「あと、オレやサイガならまだしも、お前は何か違う能力持つてんだから絶対使うなよ…」

「え…う…うん…」

「…あと、念には念を入れて聞いておくが、お前は買い物くらいはできるよな…」

「そ、そのくらいは普通にできるわよーあそこで暮らしていたからつて一応この町には来たことがあるんだし…」

そつと、楓香は外へと出て行つた。

楓香は町の中を歩いていた。が、一度来たとはいえ見慣れないためか、キヨロキヨロしながら何をすればいいのか分からぬ様子でもあつた。彼女はとりあえずコンビニを見つけて缶ジューを買い、ベンチを見つけたのでそこに座つて休んだ。

「（ねえフエリジア…）」

彼女の契約した妖魔の名前はフエジリアといつ。

『…ん? どうした?』

ちなみにこの妖魔も男である。しかし、別に妖魔が男だけだというわけではない。

「（いや…私つて特殊なの?）」

『…きなり…とこつかやはり気になつていたのか…うーむ…ちよつ

とした説明になるんだがいいか?』

「(…というかむしろ説明して欲しいわ)』

楓香は缶ジュースのふたを開け、中のジュースを少し飲んだ。

『まあ…簡単に言うと、妖魔つづーのにもいろいろあるんだ(とはいえる間が勝手に妖魔つづーのにもいろいろあるんだ(とい

る)』

「(へえ…それが私と剣妖とサイガ二人の違いに繋がるの?)』

『そういうことだ、あの二人はおそらく真人族の妖魔と契約したのだろう…』

「(真人族…?)』

『ああ、妖魔には多くの種族が存在する、真人族はその中でも最も人に近い種類と私たちの間でも言われている…一般的に普通の人間あまりと変りはない、まあ強いて言えば若干の身体能力が高いこと、あとは超能力とか…多分、そんなんじだらうな…真人族と契約した場合、基本は身体能力の向上だな、例外もあるが…』

「(…じゃあフェジリアの種族つづー)…』

楓香は既に缶ジュースを飲み干してしまった。

『私は亜人種の獣人族、その中の鳥人類だ』

「?????』

楓香はもう何がなんだか訳が分からなくなってきた。

『分かりづらかったか…まあ、獣人族というのはいろいろあつてな…その中の鳥の力を持つ一種だと思えばいい…ともかく、獣人族と契約した場合はその妖魔の類の力が能力となるらしいぞ…』

「(ふ、ふーん…なんとなく分かった…分かつてないけどね…?)』

『どつちだ…とはいえる、契約なんて未知の領域なんだ、妖魔だつてあまりするものも普通いらないからな…わかっていることといえば…あ…』

「(どうしたの?)…』

楓香は立ち上がりつてホテルの方に歩き出した。さすがにやることもないということから出た行動であろう。

『…そういえば言つていなかつたな…』

「（何？何それって？）」

『契約すると契約者は寿命が延びる…』

「…え！？」

楓香は思わず声が出る。なお、町なので周りに人は普通にいる。

『だから寿命が延びるんだ、更に若さも軽く2倍以上の期間保たれる』

「ええええええええええええええ！」

この時、周囲の人々が楓香のほうを一斉に見たのは言うまでもない。

ホテルの部屋にて。

「ア、イ、ツ、大、丈、夫、だ、ろ、う、な、あ…」騒ぎ起こしていな

劍妖は窓越しにそんな独り言を言っていた。ちなみにサイガはシャワーを浴びて、初めてなのか後ろからは明らかに苦戦している声と音が聞こえている。それに対して劍妖は苦笑いしていた。

『ま、大丈夫だと思うぞ』  
ガチャ…

「！」

劍妖はすぐさまドアの開いた音を聞いて玄関へ向かった。そこには息を切らした楓香がいた。

「おまえ…何があつた…」

「…逃げてきた…」

「…は？」

サイガがシャワーを無事に終え、楓香に事情を聞くと、あの視線に耐えられなくなつて全力疾走してきたらしい。が、劍妖もサイガもそれ以前に気になつていていたことができた。

「寿命が延びる…？」

「若いまま…？」

やはりそこであった。楓香はフェジリアから聞いたこともだいたい

は二人に話したのだ。そして、一人とも契約した妖魔からその話についてには一切聞いていなかつた。

「ま、いろいろあるらしいわ…」

「（おい、セイズ！…セイズー！…）」

剣妖はセイズを何度も呼んだが反応がない。一方であるが、

「…とりあえずもう夜だ、情報収集は明日と行こうぜ」

サイガは別に気にしていないようであつた。

## 第19話 進行禁止？

ルクレイにつけた翌日の正午前、剣妖が起き、既に起きていたサイガ、楓香とともに今日の予定の話となつた。ちなみに、一番早く起きたのは楓香で、サイガは剣妖が起きる10分ほど前に起きた。

「で、どうすんだ？」

「……とりあえず情報収集…と行きたいところだがゲームとかじゃねえんだ、そんな簡単にいくはずがない」

そもそも旅の理由なんてわけのわからない上に、妖魔なんて話して信じてもらえるのか分からぬものだ。

「そんなことよつさあ…」

「？…どうした、楓香」

「お腹すいた…」

朝食着きの宿泊なんかじゃないので、朝から誰も何も食べていない。起きたばかりの剣妖とサイガはそうでもなさそうだが、楓香は違うようだ。

「……じゃあどうか食える場所でも探すか…」

一瞬、場が沈黙に包まれたが、剣妖の話の切り出しでどこかレストランか何かを探すことになつた。チェックアウトはまた剣妖であつた。

しばらく歩いた後、見つけたのは…

「ファーストフード…か…」

「ま、少し足りない気もするけどいいんじゃない？」

ということで、朝食（というかほぼ昼食）はそのファーストフード店でとることになつた。

数分後…

「ふうー、食つた食つた… でも少し足りねえかな…」  
サイガは腹に手を当ててそんなことを言つてゐる。が、それを見ている  
剣妖は

「…お前一人で代金の半分はいつたつついの…」  
と、小声で言つた。

『で、どうするんだ? あいつら一人はついてくるだけだろ?』

「(一応、この前セリュアーラで届けといたパソコンみてえのがこ  
つちに届いているはずだし、とりあえずはそれを取りに行こうと思  
つていい… )」

「?…剣妖、どうしたの?」

立ち止まつてゐる剣妖を不思議と思つたのか、楓香が話しかけてき  
た。サイガも楓香も剣妖から離れた場所にいる。

「え、あ…ああ!」

剣妖はすぐに二人の下に駆け寄る。

「…何やつてんだよ切裂…」

「いや、まあな…」

とりあえず剣妖はパソコンを取りにいきたいと伝えた。

「そういうやそんなのあつたな… オレらあの時いろいろバタバタして  
たしなあ…」

「別に行くあてなんてないから行つてみない?」

というわけで、3人とも剣妖が送つておいたパソコンを取りに行く  
ことになった。

歩いて数分後…

「ここ?」

3人とも建物の前に着いていた。

「ああ、たぶんな…」

「ま、さつさと用は済ませますか…」

と、3人が建物の中に入ると…

「あ、やつぱりここに来たね」

「ジョーカーさん…？」

なんとそこにいたのはエイレクスで別れてきたジョーカーだった。

「ジョーカーさんつて…」

「…確かに、切裂に剣を教えた人…だよな…」

楓香とサイガは後ろで小声で話している間…

「…つてか何でここにいるんですか…」

「いやあ…まあ君が気になつたのと…ん？あそこの二人は…」

ジョーカーは後ろの二人に気づいた。それに気づいたサイガと楓香もビクツとした。

「……？剣妖くん、あの二人は…？」

ジョーカーは小声で剣妖に話しかけてきた。

「え…あ…ああ…同行者です！」

剣妖も小声で返した。

「（同行者…？仲間…じゃないのか…いや、多分言いづらいだけなんだろうな…）」

「どうしたんですか、ジョーカーさん…」

ずっとと考え事をしているジョーカーを見て、剣妖が声をかけた。ちなみにサイガと楓香は後ろでずっとどうしようか分からいでジョーカーの方を見たりしている。

「え、あ、いや…ところどころに来たのは荷物とりにきたからでしょ？」

「あ…まあそうです…けど」

「…ま、とりあえずこんなところで立ち話もなんだしね…」

と、いうことで3人はジョーカーについていき、どこか喫茶店でも探すこと…

その道中、

「なあ切裂、あの人」ここまで来たんだつたらお前送つてもらつたりできたんじゃね？」

サイガがさり気無く剣妖に話しかけてきた。

「いや、オレも来るなんて知らなかつたし…まあ、もしそれができたとしてもたぶんオレは送つてもらつてきてねえよ…」

「つていうか…どうやって来たのかしら…」

「や…さすがにそれは分からねえな…」

「そつ言いながら歩いてるうちに微妙なことにある喫茶店を発見し、そこで話はすることに…」

「…で、ジヨーカーさんは何でここに来たんですか?」

「いや…実は2、3日前にこの付近に強い空間の歪みみたいな反応があつてね…」

「空間の…歪み…つてそれ…」

『間違いなくインビンジ・ゲートだな…』

剣妖とジョーカー、また剣妖に対してはセイズが話している中、サイガも楓香も話に耳は向けているものの、ジュースを飲みっぱなしだ。

「や…でも最近じや反応がまるつきりないんだ、だから急いでこつちまで足を運んだわけ」

「…じゃあ、もつそのゲートは消えてるつて考えるのがベストですかね…」

と、ここで楓香が

「ゲー…ト?」

「あ…そつこや楓香にはまだ説明していなかつたか…インビンジ・ゲート、それがオレたちが探しているものだ…魔界と人間界が繋がる唯一の門だつて言われてる…」

「?でも…」

それでもまだ説明不足のようだつたので…

「…んじやあ、詳しいことはお前が契約した妖魔に聞きやあいいじやん…オレだつて切裂の説明だけじゃよく分かんなかつたからな」

「あ、そつか!」

「(それはオレが説明が苦手つてことですか… )」

剣妖は若干歯軋りをしていた。

「…ま、まあともかく…」この先君たちがどう向かうんだい？」

「そ、そのあては…ないですね…一応この町で情報収集しようと思つてたんですけど…」

事実、パソコンをとつたあとに聞きまわるつもりだったが、結局決断はできていなかつた。

「うへん…なら、やっぱリトイアムに向かう?」

「…トイアム?」

「あ、ごめん、その…さつきインビンジ・ゲートが確認されたつて行つた町の名前だよ、ただなあ…」

「ただ?」

ジョーカーは少し悩んでから自分の手持ち立体スクリーンで地図を開いた。

「うお…?」

さすがにこれにはサイガも驚いた。技術が進んでいる中、こうこうものも多く作られてはいるが、値段がとび抜けて違うのだ。

「これが今、僕たちのいる辺り、地名だとシヘルヴァだね…」

そう言つてジョーカーは3Dのスクリーンのとある場所を指した。

「で、ここがトイアム、見て分かると思うけど…」

「…あ、間に国がある?」

楓香が気づいたとおり、シェルヴァと示されている場所とトイアムと示されている間に別の色分けされた地域が広がつてさえぎつている。

「…」

「ゴルフィングクレウだよ…ほら」

そう言つてジョーカーが地図を縮小させるとよく分かる。なにせゴルフィングクレウ王国は北アメリカ大陸ほぼ全域を覆う国だ。

「…じゃあ、そのまんま国を横断してけば…」

「…君たちは知らないと思うけどさ、…」5、6年の間でこの国は一気に規制が厳しくなつたんだ…で、今じゃあ貿易人でも特別な許

可を得たりしなきや いけないし、観光客でも入国時には50000G以上の金が必要らしいんだ…」

「そんなあ… つてこの先全部ゴルフィングクレウって国通らないと進めないじゃん！」

楓香が地図を見て気づいたとおり、北アメリカ大陸への入り口であるセリュアーラからは必ずゴルフィングクレウ王国を通らなければ先に進めなくなっていたのだ。

「こ… これじゃ、ここまで来た意味がねえじゃねえか！」

「ジヨ、ジヨーカーさん… どうにかならないんですか！？」

と、ジヨーカーはフウと息をつき、

「そのために僕がここまで来たんでしょう…」

「え…」

3人ともキヨトンとしている。

「ま、着いてきてよ… とりあえずそのまま出発できる？」

結構、突然のことであった。

## 第1-9話 進行禁止？（後書き）

さすがに学校生活の中で続きを書くのは辛いです…  
が、とりあえずこれからは自分も頑張つてできる限り投稿を早めて  
いきます

「…で、ここって…」

「港…だな」

3人がジョーカーに連れられてやつてきたのはシェルヴァの港であった。数分で着き、森の中を歩き続けてきた彼ら、特に楓香には潮風が気持ちよく感じられているようだ。停泊している船もいくつがある。

「…で、なんとなく分かるんっすけど…」

剣妖は1隻だけあつた明らかに漁船ではない黒い船に目を向けていた。

「うん、船で送る」

「え！？」

サイガも楓香も船に気づいていなかつたようで、驚いて声を上げた。ジョーカーが指差したのはやはりその黒い船だった。

「特別に、ね、っていうか僕自身うまくいくとは思つてなかつたけど…ま、とりあえず乗つてよ…」

ということで、3人とも乗せてもらい、トイアムに向かうことにな

「（…よく考えたら私は飛んでいけるわよね…）」

『まあいいんじゃないか？』というか誰かに見られたら騒ぎになるだろ、ここはあの気のない草原じゃないんだぞ…』

「（そ、そうね…）」

3人は船に乗り込んだ。すぐにジョーカーも乗り、船を港から出した。

サイガはデッキに出ていて、楓香は船内に入つて辺りを見回していたが、剣妖は操縦席に来ていた。

「あの…ジョーカーさん、ちょっとといいですか…？」

「言わなくても分かるよ…契約のことだらう…？」

「つーつ…」

そう、剣妖が話そうとしていたことは契約のこと、先程の話をしていたときにサイガが楓香に『自分の妖魔に聞けばいい』と言ったのに、ジョーカーはそのことに対して何も言わなかつたからだ。

「…何で知つてたのに黙つていたんです…そもそも、そんなこと…どこで知つたんですか…」

剣妖はジョーカーに語り攻める。

「…あの当時は、まるで話せるような状況じやなかつたんだよ…」「どういう意味…」

剣妖が話し終える前に続けてジョーカーは語りだす。

「…剣斬さんが亡くなられたあの年…その二年前くらいからハンターの組織は崩壊していたようなものだつたのさ…」

「…?」

「その年までは一部のゲートは特定できていた…まあ…戻つてきた人なんていなきどね…でも問題はそこじやない、ゲートが不規則に出現したり消えたりするようになつたんだ…」

剣妖は口を挟むことなくただジョーカーの話を聞く。

「一応、僕達ハンターが撃滅させる目標は危害を加える妖魔だけだつた、だから危害を加えず協力する妖魔と契約した者もいた…国際政府の目を欺いてね…ただ、妖魔から情報なんて聞きだせないけど…それは君にも分かつていてるよね」

剣妖はコクリとうなずく。理由は知つていた、その情報はセイズと契約した瞬間に頭に入つてきたからだ【妖魔は人間と契約してしまふと自分達に關しては何も話せなくなつてしまふ】といふ…

「何より確かな情報は、魔界にある…唯一の確かなことはそれだけだと思つよ」

「それは…そうです、だから俺も魔界へ行きたい、いや…行かなきやいけない、そうしなきや…何も始まらないから…」

剣妖は黙つて出て行く。と、

「…まあ、ともかく今はトイアムに向かうよ、あの町は何かがある  
…きつと…」

最後にジョーカーがそう言つた。

「切裂か…」

操縦席の部屋から出た剣妖にデッキにいたサイガは気がついた。

「ん？ ああ、サイガか…」

「…切裂、お前は…俺がどうして…」

サイガは語りだしてすぐ下を向いて話すことを見止めた。

「ん？ 急に…どうした？」

剣妖は何の気なしにサイガに近づいて、デッキの端に寄りかかる。

「あ、いや…なんでもない…俺は、ただ単にお前に勝てなかつたこ  
とが…」

「いや、何か隠してんのが丸分かりなんだが…」

サイガは強がりを見せつつも焦つてていたが、空気を読まずに剣妖は  
突つ込んだ。

「うぐ…」

サイガは歯を食いしばり、なお強がつていた。それを見て剣妖は息  
をつく。

「はあ…言えよ、つづーか言わねえと、こいつが気になつまくるし  
…」

「か、関係のない話だ…これは俺自身の問題だ」

「やつぱり何かあるんじやねえか…」

「くつ…」

「…分かつたよ、今は深くは聞かねえ…ただ…」

「…」

「話せるときが来たら…いや、お前が話をなきやいけねえって思つ  
時が来たら、そのときは…はつきりお前の口からそのことを俺に伝  
えてくれよ…」

剣妖の目は真剣な眼差しだった。サイガは息をついて再び海に目を向ける。

「……すまない」

と、サイガは小声でつぶやいた、が、

「ん？なんか言つたか？」

「……切裂…」

「？」

「やつぱりお前は俺が倒す！ そうじゃなきゃ納得いかん！！」

サイガは剣妖を人差し指でビシッと指して大声で叫んだ。

「（いや、意味がよく分からん…）」

『文字通りのことだろ、気付け』

剣妖はため息をつく。

「わーかつた分かつた（俺なんか変なことした…？）」

『ああ、した』

剣妖はデッキから降り、船内に入る。中にいた楓香はジョーカーから渡されたカバンの中身を確認していたようだが、すぐに剣妖にも気づいた。

「あ、剣妖、ジョーカーさんつて人と何か話してたの？」

「まあ…ちょっととな、ところで、そのカバンつて、結局何が入つてたんだ？」

そう言いながら剣妖はイスに腰をかけ、足を組んだ。

「んーっと…保存食、水、衣類、タオル、つてどこかな」

「なんか災害時に持ち出すようなもんばつかだな…」

剣妖は苦笑いをした。

「あ、あとこれ」

「ん？」

楓香が手に持っていたのは、ジョーカーが使っていた立体スクリーンの地図が出るアレだつた。手に收まるほどのサイズなのは同じだが、ジョーカーが使つてたのは赤かつたのに対して、今、楓香が手

に持つて いるのは青色だ。

「あ、そいつか…入つてたのか？」

「うん、使うかもしないし、あつたほうがいいよね」

「そつ…だな…」

「あ、剣妖、さつき外でサイガといろいろ話してたみたいだけど…」  
楓香はそれをカバンにしまいながら、ふとさつきの事について剣妖に話を振る。

「あ、別にたいした」とじや…」

「全部聞こえてたよ」

「なんだ…」

「…そ ういえば剣妖は何で旅に出たことにしたの？」

不意に楓香が質問してくる。具体的にではないが、既にサイガには話していたことだが、楓香はあとから勝手に着いて来たも同然なので、剣妖のことなど知らない。

「オレが…旅に出た理由…？」

「うん」

「（…確かに楓香には話してなかつたしな…）「うーん…簡単に言えば…妖魔を知るため…かな…」

「妖魔を…知る…？」

楓香は不思議に思つたようだ。といふか、理解できたらそれはそれでおかしい。

「昔、いろいろあつてね…10歳からそんなことは考えてた」

「10歳…？学校とかは？」

「行つてない、といふか…最低限のこととかは自分で学んだ…だから字とか苦手だけだな」

「ふーん…」

「あ…」

「どうかした？」

と、剣妖はここで、自分が楓香に対しても同じことが気になつて いるところに気がついた。

「……そういうや、お前」いや、なんである時あんな場所にいたんだ……？」

「へ？ 私……？」

「ああ、お前」

「ん……ん一つと……」家出……かな……」

「い、家出つ！？」

剣妖はかなり予想外の答えだったからか、組んでいた足を解き、身を乗り出した。

「ずいぶん……前の話なんだ……私、よく知らないけどママやパパは知らないの」

「知らない……って……家出するまで一緒に住んでいたんじゃねえのか？」

「ううん、すんديいたのはおばさんと姉だけ、姉は私が6歳の頃にどっかに行つてしまつたわ」

「はあー……家出の理由は？」

「おばさんは姉にだけかまつていたの、私はおまけみたいな扱いだつたわ……姉だけ消えて、そしたら、もつ、なんでも投げやりな感じよ……それが嫌になつて出てきた、で、草原で出会つたフェジリアと契約したの」

「……食料とかは……？」

「もちろん自給自足よ、あ、でもたまに家から持ち出した金でライターとかは買いに行つてたわ、生肉だとさすがに死んじやうもの」  
「（野生児かよ、ライターってのも相当苦労したんだろうな……）」

剣妖は変な妄想を広げた上で苦笑つた。

「……ハ、ハハ……そ、それはそれで……苦痛だつたんだな……」

「そうね、でももうその分と同じ以上の人生は過ごした、だからそこまで深くは考えてないわ、剣妖たちとも会えたんだしね」

「フツ、ありがとう……と頷えぱいいのか？」

「さあね？」

それからじばらくし、あたりも暗くなり始めたころ、剣妖らの乗つた船はトイアムに着いた。

が、なにやら外はいろいろと騒がしい。パニックではないようだが、ライトアップされた場所に大量に人が集まっているのがかすかだが分かる。

「何やつてんだ…」

サイガも船内には既に入つていた、そこにジョーカーが降りてくる。

「選挙やつてるんだつて」

「選挙あ…？（でもまあ…だつたらここまで騒がしくてもおかしくはない、か…）」

剣妖はそう思つてすぐに納得はできたのだが、他の二人は違つた。

「…選挙つて…何？」

「俺も分からん」

「…約一名分かつてないみたいだけ…」

「えへへ…」

「ん…」

ジョーカーは一人の反応を見てなのが、口元が少し笑つた。

「簡単に言えばその区間の政治を統一する人を選ぶものさ」

「政治つて何だ？」

ここでジョーカーも凍りついた、同時に剣妖は2人の肩に手を置いた。

「お前ら…ここじゃキリがない…寝る前にさくと解説してやつからジョーカーさんに迷惑かけないでくれ…」

サイガも楓香もキヨトンとしていたが、なんとなくうなずいた。

「ま…まあ、こんな中で、町中で出てくのもどうかと思つて、今日は船で休んでく？」

で、なんとかジョーカーも話せるようになつていた。

「そうしたほうがいいかもせんね…」

「じゃあ、町の搜索は明日ね」

「詳しいことについては明日の朝、またいろいろと話すよ、そこ

階段から上がつてけば何にもないスペースがあるから利用して、僕は今日は船を見張つとく、心配はないけど万が一つのこともあるしね』

ジョーカーが指差す先に階段があつた。部屋の奥の方だつたが…

「（気づかなかつた）」

『お前：俺は気づいたぞ、入つたときには』

「（あんなとこに階段があつたなんて…）」

『どうりで興味深い性格のお前が行かなかつたわけか』

「ん？ どうした、破裂、深理…呆然として…」

「う…」

いつの日は3人は船で寝ることになつたのだった。

しかし、トイアムではこの時よりも前からとある事件が起きていた

…

## 第20話 出航中（後書き）

20話自体はずいぶん前からできていたものの、投稿がかなり遅れてしましました

次話もできあがっているのすぐに投稿できますが、22話との同時投稿にしようかと思っています

それと、見た感じ前半が少し短め、かつ文章が…という状態ですので一段落が着いたら修正入れる予定です（話数若干減？）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1765d/>

---

妖魔紀伝

2011年3月24日07時34分発行